

平成28年(西暦2016年)6月

瞑想録(その13)

滝沢 無縛(たきざわ むばく)

この一連の瞑想録の主題は、「素朴な疑問と意外な気づき」です。誰もが当たり前だと思っていることを懷疑しおよそ人が気付かないことに気づこうという、自己流哲学の瞑想集です。ちなみに科学ではありませんし、科学が万能だとも思っていません。科学でない最大のポイントは、あまたの思い付きについて証明を一切拒否していることです。私にとって証明行為は、つまらない時間の垂れ流しに過ぎません。内容は気づいた順に並んでいるので、一見ランダムで読みにくいかもしれません。

なおこの論集の一連は下記のサイトに全部収容してあります。

<http://www.geocities.co.jp/bimromav13/>

<https://sites.google.com/site/mubaku133/>

この一連の論集は下記のブログの主要記事を集めたものです。

<http://blogs.yahoo.co.jp/oseh13>

2015. 04. 18

1、歳時記に見る心象列

俳句には季語が入るのは鉄則である。季語の入らないものは川柳と呼ぶ。季語とは季節感を象徴的に語る単語である。おそらくは短歌の枕詞(まくらことば)が、俳句の方が短歌より字数が少なくて遊び言葉を挟む余裕がないことを反映して突然変異した、意味と形式を合わせ持つ一緒の装飾語だと考える。いずれにしても心象を端的に表現している単語なので、心象のありようについて季語を集めた辞典である歳時記を通して見てみることにする。

俳句の季節は春夏秋冬と正月の合計5つである。だから歳時記はどれもまず、この5季節で大分けしてある。もちろん中にはどの季節に入るのか微妙な季語もあるが、これは5つ分けを阻むほどのものではない。それ以前に季語になるかならないかの閾値、これは歳時記の編者にも依るようで歳時記によって1割くらいの違いがある。

続いて各季節内での内分けである。季語の数は数え方にもよるが約8千もあるので、5つに分けただけではおよそ探せない。そこで季節ごとにその季語の属性に応じて、

瞑想録(その13)

時候、天文、地理、人事、行事、忌日、動物、植物といった小分類を立てて探しやすいしてある。この小分類の順には特に規則はなくて、単に分類されているだけである。

時候は例えば卯月や八十八夜、天文は例えば梅雨や天の川、地理は例えば山笑うや水温む、人事は例えば運動会や焚火、行事は例えば初天神や義士祭、忌日は菜の花忌のような有名人の命日、動物は例えば鴨や蚊、植物は例えば牡丹や菊といった具合で、似たような季語をまとめると約2千個になるから、2千個を40分類として1小項目当たり50季語、まあかなり探しやすいになる。

小項目の内部の並べ方は季語のアイウエオ順ではなくて、何気に意味のまとまりによっている。これは季語が音というよりも感情や心象の表現であることと、アイウエオ順には別途全季語での索引がつくのが通例だからであろう。また、季語には案山子のようにほとんど普通名詞のものから、花筏のように季語以外はあまり使わないものまで色々だが、こういう面での分類はされない。主観が強くて探しにくいからであろう。

さて、肝心の小分類の中身を見てみよう。これはおそらく歳時記にもよるであろうが、私の歳時記で見ると例えば春の地理の場合、まず雪解け～斑雪と雪関係、次いで薄氷等氷関係、次いで水温む等川関係、最後に逃水等の海関係となっている。これもできるだけ近そうな順に並べて検索者の便を図ったかの感はあるが、この辺になってくると遠い近いには主観も入るし、構造的にそもそも多様なものをきれいに順序だてられるわけもないので、結構跳んでいる。

さらに今見たうちの「春の海」関係の季語を掲載順に全部並べると、春の海、汐干潟、春潮、春の波、春の園、逃げ水となっていて、ここでもできるだけ順序立てようという気持ちは見られるものの、むしろ無秩序感が強い。数個ほど少なくなると秩序も見いだせないし、秩序を特につけなくてもさほど探しにくいと言うことだろう。

小分類をまたぐと、夏近の次が春の雪だったり、霜柱の次が大根引くだったり等大飛びするが、これはもう仕方ない。大分類をまたぐとさらに水仙の次が新年だったりするが、つまり明白に断層が横切っておよそ法則など受け付けないが、これは仕方ないし当然だ。この世界は線形代数ではない。

このように見ていくと心象の代表抽出と位置付けられる季語を、必要とはいえ一列につまり一次元に配列しようなどという試みが本質的に無謀であることが分かる。見かけこそ一列であっても意味においては凸凹していて、一列でもなければそれらの間の間隔も不揃いだ。だから仮に季語に1, 2, 3などと順番をつけてもほとんど意味をな

瞑想録(その13)

さないし、ましてやその順番の数字で加減乗除の演算をやろうなどとは、およそ馬鹿げている。

この一見の乱雑度あるいは一次元写像不可能性は今の歳時記の並べ方がベストでないからではなくて、どんな並べ方をしようが決して数字や演算とはなじまない。心象と数字はこれほど水と油なのだ。しいて言っても「部分的に連想はあり得るかな」といった程度である。ましてや日常の環境の多様さや文学の長さあるいは個々の心象の複雑さを考えれば、ここに何らかの秩序を見出そうとは絶望的な試みに見えてくる。

似たような無理さにはほかにも例があって、2つほど挙げるとすればまず番地の付け方、例えば上町一丁目に番地が付いているとして、かなりの部分で次の番地は隣だったりするが、あるところではどんと飛ぶ。さもないと付けようがない。季語と似ているが家紋や名字の順番も、また一筋縄ではいかない。本の整理も一筋縄ではいかない。ワンクリックでスマートに見えるネットによる本の取り寄せでも、裏舞台の倉庫では人海による泥臭い本の取り集め工程が省けない。

言い換えればこの手の非順序を仮に部分的にでも解消できれば、これは理論だけでなく産業としても大きくコストダウンに寄与できるということなのだ。特許も取れるだろう。誰か何とかならないだろうか。

2、アナログ演算

先日指摘したように現行の算数や数学で習う数字や演算は、平面や線形次元空間といった「平らで方形なもの」を暗黙に仮定して初めて出現するものである。数字や足し算は数直線を、掛け算は平面や我々の住む3次元空間を念頭に置いている。そしてこう言った外界に係る計量のニーズは多いものだから学校でも義務教育となっていて、誰でも習得させられて常識となる。一見空間と無関係に見える経済も元は金が見並べだったことから、平面を前提としていて数字の計量である。

ところが「形」と言う人の自然な把握の仕方や、心の中の心象の分布やありようを見つめると、これらが平面だったり方形だったり、さらにどこまでも同様に広がっているとは考えにくい。「ラーメンが好き」を平行移動すると「ショコタンが好き」になるわけではないし、「トマトが嫌い」に「煮込みが嫌い」を掛けると「ケチャップが嫌い」になるわけでもない。ある三角形を平行移動しても合同だと言う一見の「当たり前」は、実は平らな線形次元空間の上のみで可能な、きわめて人工的で特別な場合なのである。

瞑想録(その13)

ただ他方でアナログの、形状と連続体を基礎とする一般の空間は、例えるならば粒径のいちいち異なる結晶粒が乱雑に隣り合っているようなものだから、この手の空間は自由すぎて一般的な定理や演算がおよそ入りそうもないだろうとも指摘した。ならばアナログ空間は全く無秩序かという、そうでもない。そこには蓋然的な基礎法則の、「普通は〇〇だろう」とか「基本的には××だよな」と言った、概略の法則がしばしば成り立つ。

ここで「普通は」とか「基本的に」がどういう意味で普通であるかについては、思うに3つの観点がある。すなわち、①常識に照らして、②モチーフに照らして、③メッセージに照らしての3つである。もちろんこのほかにもあるかもしれない。

常識に照らして普通とは例えば、「あのケチな人がドンと寄付するとは思えない」といった感じである。モチーフに照らして普通とは例えば「まじめな武士道の劇の一部に突然お笑いが入っているがこの場面は必要なのか」といった感じである。そしてメッセージに照らして普通とは例えば、「親孝行をしなさいと言う傍らで勝手に出ていく勇気が大切だと言われても結局何を垂れたいのか」といった感じである。

逆に言えばケチな人は次もケチだろう、武士道映画はすべてまじめだろう、親孝行で始まれば最後まで親孝行だろうという相場観、これがアナログ自由空間での法則であり演算である。線形空間の定理ほど謹厳実直で調子良くないのだから、同じほどの厳密さを期待されても無理だ。だが線形空間の定理がしばしば形式的な式の変形で、知恵がなくても機械的にできてしまうことを思えば、自由空間の法則の方が気づきに脳の働きの要求される。さらに言えば、状況の変化にすぐに対応して予定の動作を機敏に差し替える余地があって、この余地を生かせるほどその人には知恵があるということだ。

さて、この観点から究極の心象である夢を見てみよう。夢は常識からもメッセージからもモチーフからも自由で何の拘束もない究極の心象であり、だからこそしばしば素の普段は意識の上に浮上しなかった無意識や未来予測ができる。過去においては今以上に夢と夢占いが重要視されたが、これは根拠のないことではない。

聖書にはパロ(エジプトの王)の夢をヨセフが解いた話が載っている。根拠レスを嫌うキリスト教でさえ、非合理的なはずの未来予測の夢解きの話が出てくるのだ。そしてヨセフはその気づきに鋭さのゆえに称賛されている。日本でも後醍醐天皇が「南方に木のある夢」を見て、これが忠臣の楠正成であることを読み取ったと言ったことがあった。こ

瞑想録(その13)

れなぞはかなり理屈がかった夢である。そしていずれの例でも、夢を通してでないと言見できなかったことである。

以上の観点から最近私がたまたま見た夢の、その夢で初めて明確化されたモチーフやメッセージを読み取ってみよう。

<夢1>私は無実の罪で告訴され裁判の被告人になっていた。判決は主文を後回しにして判決理由の朗読より始まった。極刑が予想される。でも本当に身に覚えがないのだよ、誰か助けてくれ！と叫ぶ一方でこの事案を「当然である」と客観的に眺めるもう一人の自分がいた。

<気づき1>昨日の熊本地震を挙げるまでもなく人はいつ不幸が訪れるか間断の安心もない。理不尽にも救済されないことがある恐れと、その理不尽が形式的には理に叶っていると理解されるこの世の理不尽が同居している。この夢は、「この残酷な矛盾こそがこの世の実相だよ」と実は気づいて恐れているとして解ける。ある日このブログの更新が途切れたら、それは私が無実の罪や健康診断の怖い結果によって地獄に落とされたからだと思ってほしい。ちなみに私は痛くない限り医者には行かない。

<夢2>夜マンションに戻ってエレベーターに乗ると、無限にどこまでも上昇していき、ついに町の光が眼下に望めるほどになる。怖くなってあたりを見回すと、同乗していた人が壁に吸い込まれて行って消えたり別の人が壁から出てきたりと生成消滅を繰り返す。その上天地の上下がなくなって錐もみ状態になった。びっくりして「どうなっているのだ！」と叫ぶと、「これが実相だよ」という天からの声が聞こえてきた。

<気づき2>これはひたすら、私が従来から提案してきた心象空間あるいは非次元アナログ空間のありようを、私が理性でイメージしてきた以上に典型的に描いているのだと思われる。

どうだろうか。私は気づきや直感の鋭い方ではないので、もっと直観力のある人なら私よりも深く読めることだろう。また私はこれまでに、「夢と解釈」と題して4本の記事をアップし合計30個ほどの夢を記述してきたが、これらも現在の視点で見直せばもっと深いメッセージがありうるようにも思われる。

3、文様の幾何学性

先日、初等幾何の先にある「高等幾何」はトポロジー等の現代幾何ではなくて、紋章やデッサンなどの図形であるという意見を載せた。そしてその理由として、トポロジー等の現代幾何は問題を群等の代数学に置き換えて、その方法で解ける問題だけ

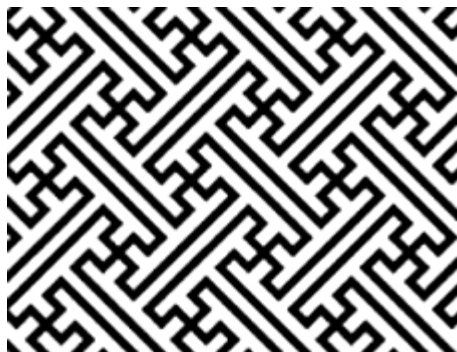
瞑想録(その13)

解いているだけで、物の形というものに素直に向き合っていない点を挙げた。初等幾何が義務教育で珍重されるのも、形に対する正面からの取り組みが人の正常な発達に不可欠だからである。

さてその紋章やデッサンだが、もっとも単純なのはおそらく家紋だろう。丸や四角の中にきわめて抽象化幾何化された花鳥風月とかあるいはもっと簡略に菱とか井形とかが入っている。しかしこの段階で既に、家紋によっては線対称だったり回転対象だったりするものの、もはや従来の初等幾何のように未知の長さや角度を計算したりあるいは合同や相似を証明したりするものではなく、むしろその抽象化の上手さという意味での知恵を愛でる対象になっている。

別の面で幾何学を思わせるものに、文様がある。文様は着物や手ぬぐいの模様等になるもので、代表的には昔の女学生(ハイカラさん)が着た羽織の「矢羽」模様であろう。まあ定義としては、①広い意味での繰り返しになっている、②その基本単位は程度の差こそあれ幾何学的に抽象化されている、と言ったところであろう。矢羽のほかにおなじみなものでは、「亀甲に花菱」とか「紗綾形」とか「笠松」とか「唐草」とかがあって、いずれも同じ基本単位の繰り返しである。

特に「紗綾型」は、複雑な同じ形の互い違いで全空間を埋めており、その幾何学的な思い付きには、この分野で著名な数学者のペンローズ先生も評価してくれるのではないと思われる(下図)。このように文様も、証明の要素はないが形の脳トレにはなかなかの優れものである。



ところで文様の定義で、「広い意味での繰り返し」と言ったが、これがもし厳密に繰り返していれば従来の幾何学の範疇に入る。幾何学とは群という代数構造が存在することで、群とは簡単に言えば繰り返しのことだからだ。繰り返しがあるからこそそこに定理が成り立つし、基本単位のみで文様のすべてが完璧に予言可能だ。ここまで行く

瞑想録(その13)

ともはや蓋然法則ではなく古典的な確定定理である。今あげた紗綾型も、形は意表をついているが繰り返しは厳密である。

例えば分子、メタンは「CH₄」で、炭素の周りを水素が正四面体型に結合している。その意味でメタンは基本的に3回対象群を4つ持つ対称性の高い形で、その対象は点群で指定できる。エチレンの「CH₂=CH₂」も、別の群だがやはり点群で記述できる。そして群で記述できるということは、例外を認めない代数の対象であり完璧な幾何だということだ。

ところがこれらの分子も、基底状態では素直に点群であるものの、常温では結合(ボンド)が振動や回転等をしている励起状態にあり、もはや群から外れていて代数や幾何で処理できない。事物は代数の対象であれば極めてスマートかつ短時間で証明できるのだが、今挙げた理由により化学反応は、振動や回転も正確に記述できる「第一原理の量子化学計算」で膨大な計算時間をかけてしこしこやるしかないのだ。

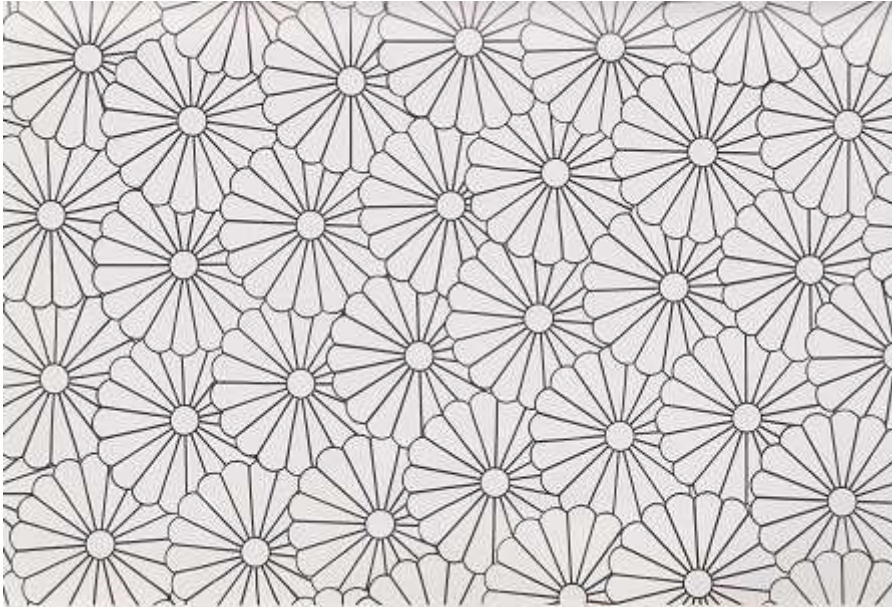
そして実は同様のことが文様についても言える。下の図は唐草である。典型的な唐草であって模様は一見繰り返しのように見えるが、よく見るとどこにも繰り返しがなくて部分ごとに違っている。部分ごとに違っていながらあたかも同じであるかのように均等に空間を埋めていく技はさすがというしかなく、ここに技能が極まっている。そして違っているからこそ味わいが深く面白いのだが、少しでも違いがあればもはやこれは従来の意味での幾何ではないし、群や幾何の定理や証明手順は無力である。



実は文様を数多く見ると、大きな意味での繰り返しはあるものの、そのような繰り返しすらなければもはや文様とは呼ばずにデッサンとか絵画とか呼ぶべきであろうが、文様の定義で「広い意味での」を付けた深い意味はここにある。例えば画面いっぱいに菊を散らし重ねた菊模様でも、よく見ると菊の花の重なり方はいちいち違うし、だからこそ味わい深いのだが、つまり形の把握の極致であるのだが、そして繰り返しが確定

瞑想録(その13)

的でなく蓋然的であるから大人の景色になるのだが、そこにはもう初等幾何の面影はない。にもかかわらずよっぽど形であり幾何である。



この事実はいったい何を意味するのであろうか。私の答えは、従来の初等幾何は形を正面から見るといいつつも、実はその形のうちで定理に乗れる長さや角度、あるいは合同や相似という面にしか光を当てていない偏ったものだということだ。だから「初等」で終わっているのだ。本当に形を突き詰めようとしたら、従来の科学や学問の枠にとらわれずに、もっと広い形の訓練をしなさいということだ。まあそう言っても無理だろう。学問や数学というからにはそこに論理がないといけないし、これは破れない固い殻だからだ。菊模様を描くのには知恵が不要かと言えれば必要だが、それは論理脳とは違う。

この点は実は、アナログ集合や蓋然論理が抱える問題と同様だ。アナログの見方とは端的に言えば形をそのままにとらえることだが、そしてここで「形」とは目に見える形のみならず小説のモチーフのようなひと固まりをさすが、そこに論理が入る余地はあるものの解は多様だ。それぞれの人の見方による。蓋然論理も同様で、理解に知恵は要るものの繰り返しがずれる時点でもはや厳密解は存在しない。必要なのは論理力ではなく、ばらつきがある中で一定のモチーフを見出す蓋然力である。この時点になるとペーパーテストによる点付けができないので、現行の教育には向かない。

有名大学を出たインテリに押しなべて見える、完ぺきではあるが一種の紋切り型で表面的な発想の偏りは、以上の議論から、唯一解のある論理に教育が偏りすぎていて

瞑想録(その13)

形の不思議さに感動するという教育がほとんどなされていないせいであることが分かる。過ぎたインテリは、意外な発想や気づきができずに死んだ知識だけため込んでいることが多い。不幸なことである。

最後に、先の菊模様なら「幾何ではなくとも幾何をもとに乱数で描ける」という人も居るかもしれない。ならば自然にできた砂模様はどうであろうか。また「目が大きいほうが可愛い」と言う蓋然論理を説明できるだろうか。



4、働くオジサンおばさん

少子化に伴ってピラミッド社会が崩壊し、また日本経済の競争力回復のための賃金実質切り下げのために、現場で働くオジサンおばさんたちが増えている。一番増えているのは子育てが終わったおばさんがレジ打ちに行くとか、小遣い稼ぎをしたいあるいは毎日が日曜日で死にそうな定年退職後のおじさんのガードマンとかだが、今日は少し違って実質現役のオジサンおばさんたちの働き方の話をする。

「50歳を過ぎて本社に残っているのは社長か小使くらいだ」と言われて久しいが、最近少し様子が変わってきた。主な理由は少子化と年金支給年齢の後退であろう。昔は年齢構成からどの会社でも年功序列のピラミッドが敷けて、学卒なら年が来ると誰でも部長になれた。ただし部下を持つ組織上の部長ではなく、多くが部長待遇とか称呼部長とかの「名ばかり部長」だったが、それでもただ座っているだけで威張れてかつ相当な給料がもらえた。

30年前は子会社も合わせると誰でも部長になれたが、子会社組はブーたれていた。20年前は子会社も合わせると誰でも課長になれたが、子会社組はブーたれていた。10年前は早期退職に応じれば誰でも子会社に行けたが、子会社組はブーたれていた。今は子会社を斡旋してもらえたというだけで、給料は半分でも涙を流して喜んでいる。

瞑想録(その13)

先日私はとあるデパート内の画廊を覗いてみた。それ以前にも別の画廊に行って、新入社員の客あしらいの練習台にされたことはあったが、今度の画廊は少し態度が違っていた。ソファーに座って図録集などを熱心に眺めていると、50代半ばくらいのおばさん店員が親切にも話しかけてきた。「新入社員のころはまだ昭和だった」と言うから、おそらくそのくらいの年齢だろう。

担当の美術商業界について長く、経験も知識も豊富でよく知っていた。そして明らかに素人の私が生半可な知識でする質問に、身なりからして明らかにおよそ買いうるものなのに、詳しくかつ惜しげもなく教えてくれた。50を過ぎたおばさんがこれほど熱心なのは初めてだったので不思議にも思ったが、想像するに退職金につられて早期退職した毎年契約更改の囑託のおばさんで、部屋のどこかにはかつて部下だった上司の目が光っていたのだろう。

とにかく自分でも店を開けるほどに詳しい。どんな質問にも適切に答えてくれた、ただ1つの質問を除いて。その1つの質問とは、「この業界も基本はOJT(経験伝授)だ」と言うので「あなたもさっきやっていましたね」と答えると「はあ？」という返事だ。想定質問のレパートリーにないというのか、何を聞かれているのか見当もつかないという感じだったので、「今さっきあなたも後輩の指導をしていたではないですか」と言うと、天井を見上げて「そうでしたかね？」などと答える。要するにこのおばさんは長いサラリーマン人生で摩耗して、自分が1分か5分前に何をしていたかもまるで覚えていないのだ。

すぐ過去を覚えている、これは自己保存や安全にも重要な本能的機能だと思う。だが長いルーチン人生とは恐ろしいもので、美術品の取り扱いと言う一見楽しそうな職場にあっても、いつの間にか本能すら滅失しているのだ。そういう私も会社のおかげで、自分の損得に関係のない天下国家は全く考えない習慣と、会議室の椅子に座ると自動的に脳が停止する習慣が身に付いた。これだけが社畜30年の成果と言ってよい。だから私もこのおばさんの脳構造はよく分かる。

別の話だが、最近歯が痛くて近所のモールの歯医者に行った。前にも断ったように私は痛くない限り医者にはいかない。高血圧で高コレステロールだが、痛くないので気にしない。ところがこの日は痛いので歯医者に行った。モールの病院なので医者が何人もいて会社組織のようになっている。私の担当は40過ぎのちょうど脂がのった頃のような歯医者だった。会社だったら課長くらいやっついそうな年ごろだ。

最近は歯科医院が増えすぎてコンビニより多いという。この人も実力では開業できそうなのになぜかいまだに一介の歯医者をやっている、組織の常としてちょっとしたことでもいちいち上司医者にお伺いを立てている。ちょっと痛々しい光景だった。そしてこの歯医者の治療技術、これは完璧だった。完璧と言うより、完璧すぎて無駄がなさすぎほとんどロボットのようなのだ。もはやスキルベースを通り越して「飽き飽きベース」になっている。目も何気に遠い。40歳そこそこで飽きてしまって、あと25年どうやって生きていくのだろう。

さらに別の話だが、昨年11月にネット詐欺にあってその顛末を管轄の警察署に届けに行った時のことだ。ほとんど定年間際のオジサン警察官が率先して相手をしてくれた。一昔前なら警ら係長でもやっていそうなオジサン警官だ。ここも公務員の職場なのだが、もはや「爺さんが率先的にやる気を見せない」と居にくくなる」雰囲気醸成されているらしい。話を聞いてはくれたがこんな爺さんがネット詐欺を理解できて本当に調書を作成してくれたのか、今でも不安である。

こういうわけでアベノミクスはここ数年かなり末端まで浸透してきて、オジサンお婆さんが自分の体や心に鞭打って平社員の担当者をやるという、それまででは考えられない時代になってきた。だがこの調子で日本が行くところまで行って本当に大丈夫なのか、何気に不安と憐憫が混じった感情に陥ったのだった。

5、理解の境目

私は最近、ティンガティンガについての解説文を読んだ。ティンガティンガとはアフリカ発祥の画法で、①色の強いコントラスト、②自然の特に動物を主題とすること、そして③具象と抽象の大胆な組み合わせを基本とする、画期的かついかにもアフリカの大地を連想させる画法である。ちなみに私自身は、絵画の世界については全くの素人である。

その解説文の中に、「この画法の世界的な注目は、あたかもアフリカ音楽が世界へ怒濤の如く流れていった時代とシンクロした」と言う一文があった。私は絵画だけでなく音楽も、要するに芸術全般について全くの素人であって、アフリカ音楽と言ってもサンフランシスコ旅行中に買ったCDがたまたま1枚ある程度である。にもかかわらず私は、今引用した一文を読んで即理解した。

もちろんことの詳細は分からないし、他人に説明しろと言われても全くできない。だが引用した一文について「さもありなむ」と感じ、自分なりに納得した訳である。だからも

瞑想録(その13)

ちろん理解にはレベルの問題が存在するものの、引用部分だけでなくその解説全部を特に障りなしに読み通せた。

ところがやはり音楽についてであるが、作曲家のマーラーの作品の中で一番著名な交響曲第5番について、「この序奏部で重要なのは、吹奏が終わると絶壁から底の見えない谷底を覗き込んだ時のような『暗黒＝死』のイメージが広がっていることだ」と言う一文を読んだときに、今度は全く理解できなかった。

私はマーラーも交響曲第5番も聞いたことがない。聞けば思い出すかもしれないが今は印象がない。だから今の一文が理解できない、何のことかさっぱり印象がなくておよそ心象が形成できないのは当然だ。であるならばなぜ先のアフリカ音楽の部分については、同じほど基礎知識がないのに理解した気になれたのだろう。

おそらくアフリカ音楽の場合は、自分なりに心象が形成できていて、その心象が脳空間内の適切な位置に既に置かれていたということであろう。この心象の形成の有無が決定的なのだ。もしかしたら私の心象は間違っているかもしれない。だがこの際に重要なことは、心象が正しいか否かでなく心象があるかないかである。おそらくアフリカ音楽が再認識されることについて、以前から肯定的な予感があったのだろう。

私は先日、個人番号カードを区役所まで受け取りに行ってきた。その時にカードそのものだけでなくそのカードの保存の仕方や持ち歩き方、さらにはそのカードがいかに便利かを記したパンフレットも受け取った。私はそのパンフを帰りのバスでざっと目を通したのだが、その時は何を書いてあるのか全く理解できなかった。時間の制限もあり、いわばばらばらの断片的な知識しか得られなかったのだ。

ところが家に帰って机に座ってゆっくりと読み直すことによって、全体像を理解したとの感触を得た。もちろんユーザーとしての理解だから、例えば個人番号をどうやって割り振ったか等の技術は知らないが、それは特に問題ないだろう。また個人番号に関する裏技も知らなくて、これは詐欺にあわないためにはある程度の知識があったほうが良いのだろうが、これも後でよい。

さてここで私が自分に驚いたのは、バスの中と家の机で理解した知識の量はほとんど変わらなかったということだ。つまり振り返ればバスの中ですでにほとんど理解していて、単にそれらが有機的につながっていない状態であった。そして家でしたことは知識を増やすことでなく、それらをつなげて体系化し1つの心象とすることだけだったのだ。

私は仕事柄マニュアルや取説を読むことが多いので、こういう経験は初めてではない。つまりこの「理解と知識と全体観の齟齬」と言う関係は、科学の対象となりうる再現性のある事象なのだ。そして先の音楽の例や今回の取説の例でいえば、人が事物を理解するとは個々の知識を指すのではなくて、あくまでも全体観が得られてその全体観を良いと思えて脳空間の適切な位置に据えられることである。もし全体観を良いと思えなかったら、当然に脳空間にその心象の位置はないであろう。

脳空間での位置、これは脳空間が非次元空間であるためにイメージするのが難しい。特に遠いものが近かったり上のものが下だったりあるいは別のものが同じだったりするからである。あるいは縦・横・高さのような規則性もなく数字や四則演算も受け付けない、いわば多結晶がばらばらに散在するような状態だからだ。

だがそれにもかかわらず脳空間が秩序としてあるから、人は常にほぼ適切な行動と対応と選択を取ることができて生命の安全が保たれている。言い換えればこの脳空間に異常をきたした時が精神に変調をきたした時つまり精神障害になった時である。彼ら精神障害者の描く絵は明らかに異常な波動を発していて、見つめすぎると精神異常が自分にも伝染してくるかのようなのだ。

つまり本日のまとめとしては、①医学でも最も理解が遅れている精神現象について光を当てるには心象と脳空間のより深い理解が必要である。②そのためには「理解した・しない」の境目を見ることが良いきっかけである。かつ③その法則は、従来の多次元空間を前提にした数字や四則演算では記述できないということだ。

6、明治大学のOB2人

先日駿河台の明治大学博物館に行ってきました。この博物館にはOBの阿久悠さんを記念した阿久悠記念館が併設されており、また企画展はやはりOBの上村直己さんについてでした。本日はこの、全日本あるいは世界レベルで時代を画した2人を鏡に、不肖自分の日々を振り返りたいと思います。

ちなみに大学博物館と言えど創立者を除くと、早稲田大学は會津八一と坪内逍遙であり、國學院大學は折口信夫と柳田国男でしたので、それぞれの大学のカラーが出ています。明治大学は学問にとらわれない庶民文化の革新がカラーのようです。

瞑想録(その13)

先ず植村直己さん、世界的な登山家で5大陸最高峰を初の単独制覇後にマッキンリーで消息を絶ちました。彼が登山に目覚めたのは2年ほど社会人をした後に明治大学に入って登山部に素人入部してからなので、「小さいころからの夢」という訳ではありません。その後めきめき頭角を現し、卒業後はもはや定職に就かずに山小屋等でアルバイトをして資金を稼ぎつつ、貧乏旅行で5大陸最高峰を制覇します。

その間に彼が日本で住んでいた下宿は場末の風呂トイレなしの3畳間で、そういう意味では今でもお笑い芸人予備軍とかまだ売れてないミュージシャンとかもよくやっておられますが、徹底した貧乏生活でした。これは口で言うのはやさしいけれども、大志がないとできることではありません。

最高峰はいずれも高地にあるので、寒さと低酸素との戦いです。それに植村さんの場合は孤独も関わりました。犬橿(そり)の練習のために2年もグリーンランドに滞在したり、アンデスはフォークランド紛争のあおりで予定が中断されたり等の紆余曲折も経験しました。遭難の際は世界中が悼みました。

続いて阿久悠さん、この人は昭和を代表する作詞家で、作った歌詞は5000曲、そのうち500曲以上がヒットしています。仮に作詞生活50年として、3日に1曲作成し月に1曲はヒットしていた計算になります。その歌詞のレパートリーも、ピンクレディーのように挑発的に飛んだものから、八代亜紀の「舟歌」のようにしみじみしたものまで、とにかく世界が広いです。

昭和40～50年代は日本も高度成長期で、グループサウンズや「スター誕生」等の芸能ものの特に歌謡の世界は大きく伸びて時代をけん引していました。その歌謡の世界をけん引した阿久悠さんなしでは、昭和の文化も世相も全く語れないでしょう。ところがその阿久悠さんが本当になりたかったのは、実は小説家だったそうです。実際に小説も何冊も書いているのですが、私は記念館に行くまで彼が小説を書いていたことすら知りませんでした。多くの人が似たような状況ではないでしょうか。

どうも阿久悠さんはあれだけ作詞家として成功しながらも、本当なら作家になりたかったと死ぬまで思っていたようです。考えればぜいたくな悩みです。ヒットをせめて1曲でも出たくて耐乏生活を送る人が何人もいる中で、大ヒットを連発しながらもそれが第一希望ではないとは。

でもこういう人は実は結構いて、例えば米国のフォード元大統領も大統領になった後でさえ「実はフットボールの選手になりたかったのだよ」と言っていました。今まさに売

瞑想録(その13)

れっ子の評論家の池上彰さんも、本当になりたかったのは解説委員だったそうです。田中正剛さんも「TVチャンピオン」の司会等で売れっ子でしたが、TVはあくまでも資金稼ぎで今は牧場の経営者になっています。

さて、ここからは話の質がガラッと落ちて、不肖私の振り返りになります。つまらない人は飛ばしてください。私は若いころから自分なりのライフワークを持っていました。そのライフワークがぼやっと見えてきたのは高校卒業から大学入学あたりです。ただ私が上記の2人と一番違うところは、そのライフワークが心象としてはありながら、どうしても自分で掴めない、言葉にできないことでした。

学問をやってもこれは違う、仕事をやってもこれは違うと消去法ばかりで、しかもこの世におよそあるすべてのことが消去されてしまって、結局何にも腰が引けたままの、言いしれない不満と怒りを抱えたまま無為の20年間を過ごしました。もしもっと早く気づいていたら、あるいは植村さんやお笑いの卵のように会社を辞めてバイトしながら瞑想の耐乏生活を送っていたかもしれません。

このライフワークが何とか見えてきたのが10年くらい前で、言葉にできるようになったのはわずか3年ほど前です。そのライフワークとは、この世で常識あるいは当たり前と誰もが疑わないことの多くが、実は全然あたりまえでないことを明らかにすることです。できれば「今の物は違う」ではなく「今の物は一部で本当はずっと違って広い」という実像を具体的かつ前向きに示すことです。そしてそのためのキーワードが「素朴な疑問と意外な気づき」と表現できることにも最近気づきました。

こうして特に今の数字や四則演算あるいは事物の脳による把握の様式を中心に、その辺の「より人に自然なところ」を狙って現在徐々に瞑想中です。ただこれは大きな問題を含んでいるので、私の残りの人生だけでは全部は解決できないでしょう。ほんの入り口に立ったところです。でも仮に私が今日事故で死んでも、「本望を完成できなくて悔しい」という気持ちは全くありません。ライフワークの何たるやに気付いたところで、私はかなり満足です。すっきりしました。

さらに私はヒットしようとか法統を残そうとかそういう山っ気も全くないので、自分の日々の瞑想結果に満足している現在、こうして私が書き残している瞑想結果が私の死とともに散逸してしまっても少しも不満はありません。おそらく人生で一番幸せな時分に居るのでしょう。ほどほどの希望が満足のコツだと悟っているつもりです。

7、感動の起源

戦後70年、良くしたもので今時まずい食べ物など欲しくて探そうにも、ない。それこそ名もない無数の社畜さんたちの努力のおかげだろう。それこそ彼らに足を向けて寝られない。私自身はグルメの味は判別できるつもりで居る。キハチとかミクニとかは味はもちろん見てくれからして違うのだろうが、他方で袋麺でも冷凍フライドポテトでも一向に構わなくてできていて、我ながら幸せ者だと思っている。

ところが先日数十年ぶりに、「これは完ぺきにまずい」と思えるものを飲んだ。「糖質0のワイン」だ。もうワインと言うよりヒマシ油に近い味だ。おそらく売りとしては「糖尿病の人も飲めるワイン」と言うことなのだろうが、こういう物はスーパーでなくて薬局や病院で売るべきだ。ちなみに大手ビール会社の製品なので品質に問題はない。おそらく「糖質0のビールで成功したのでそれではワインも」と言うことなのだろうが、この発想が恐ろしく社畜だ。

もちろん物によっては、ホヤやクサヤのように「最初はまずいが慣れるとむしろ旨い」と言う食べ物もあるだろう。つまり人には誰にも「ワインとはこういう物だ」と言う相場観があって、「単にその相場の幅から外れているためにはじめはまずいと感じるだけだ」という可能性だ。例えば外人にとっての納豆とか、タイ人以外にとってのドリアンとかだ。

だが、「太田胃散を毎日飲んでいたら旨くて常習するようになった」などと言う話は聞かない。あくまでも「良薬は口に苦い」のだ。そして糖質0ワインも、やはり社畜さんたちの今後の努力で少しはましにはなるのであろうが、「甘さが本質のワインの糖質をなくす」という発想自体が考えられない。

こう考えてみると、旨い、美しい、気持ち良い、楽しい、愉快だといった感覚は、個人差はあるものの多分に先天的で、「どんなものでも心頭滅却すれば旨い」などと言うこととはなことが分かる。ひっくり返っても「私の作った皿が人間国宝の浜田庄司の皿より美しい」などと言うことはありえないのだ。殴られて気持ち良いなど言うこともおよそ考えられない。ではさらに戻って、人はどういう仕組みであるものを好み他の物を嫌うのであろうか。

以前にも指摘したが、「うれしい」の大元は、自己保存本能の「安全だ」であると思う。だが人の場合この大本を忘れて独立なほどに、「うれしい」が極大化して、人生の目標や生きがいの位置にまで昇華している。実際先の例で、糖質0ワインがまずいのは

瞑想録(その13)

命を守ることとおよそ関係がない。他方で人類が発生したはるか後の最近に合成された化学調味料を、旨いと感じる。

もっと戻って、以前にも指摘したが心象や感覚が未分化の赤ん坊の場合、素朴に痛いのは嫌いでミルクは旨くて好きだ。この時点では旨いまずいはまだ安全に結びついている。つまり人は成長とともに安全が十分にできてきて、美術や音楽やグルメの素晴らしさを感じる余裕を持てるようになるのだ。そして人はその素晴らしさを評価できるほどに、脳の容量も増加して進化している。

結局生物の進化は人に、感動するという余裕を新たにもたらしたということだ。これは豊かな人生を送るうえで大変に貴重な能力であるが、他方でそれが実現できないときには悩みの種にもなる。「命の危険がなくてもうれしくない」とは、考えればぜいたくな余裕だ。

ぜいたくついでに指摘すれば、嫉妬心とか意趣返しとか「人の不幸は蜜の味」と言った、人として最低の卑しい心としてどの宗教でも真っ先に禁止する種類の心象、これも実は人にしかできない極めて高度な心の営みなのである。このように、進化すると新たな問題も付随して発生する。何万年後かは知らないが未来人間が獲得するだろう何らかの新たな能力の模様も、似たようなものではないか。

ところで話を元に戻して、初めての未経験なものにも「うれしい」とか「つまらない」と感じるその仕組みは何だろう。思うに大元はやはり五感の信号ではないか。糖質0ワインのまずいも、もちろん複雑な脳処理の結果の判断であるとは言え、そのきっかけは舌から発せられる味覚の信号のスペクトルだ。ただ人には優れた学習効果があるために、経験的に「こういう感覚はふつう嫌なものだ」と言う相場観ができていて、かつこの相場観の総体がほぼ本能から独立しているということだろう。

喜び等の高度な感情は、学習効果が大きい分だけ個人差も大きくなることになる。典型的には趣味だ。廃墟マニアは崩れかけた廃屋などにいたく感動するであろうが、他の人にとってはおどろおどろしい幽霊屋敷にしか見えない。

そして人々は多分にその趣味をしたくて趣味のための資金稼ぎを目的として、時間を拘束される社畜の状態に自主的に甘んじる。つまり「うれしい」や「楽しい」は人類においては、一時的に自由を捨ててもあるいは3K職場のように危険をお冒してでもどうしても得たいライフワーク、つまり生きた証になっている。「危険を冒してでも獲得したい」、この時点に及んではもはや本能に反している。

「人の本質は喜びだ」、もはやこう定義しても良いと思う。ただ喜びは基本的に個人単位であって集積効果はないから、人類の進歩史の観点からはほとんど太陽の恵みのエネルギーの無駄な垂れ流しであって、効率とか効用とかは限りなく零だ。狭い道德論者や功利主義者それにキリスト教やマルクス主義者たちはこの状態に眉をしかめるだろうが、私は現状の垂れ流しこそ素晴らしいと思っている。私の日々の瞑想行為も自分なりの価値を生み出しているつもりではいるが、エネルギー垂れ流しの観点からはパチンコと同じだと言われても反論できないしするつもりもない。

8、洗脳と教育

洗脳と教育、これらはどう違うのだろうか。「違うにきまっているだろう、良いのは教育で悪いのは洗脳だ」と言うのが最もわかりやすい答えだろう。だがこれでは個々の行為が教育なのか洗脳なのか判別する基準にならない。また悪いことに、洗脳を受けた人もそれを信じているうちは教育だと思っている。

もう少し踏み込んだ基準として、「本人を伸ばすのが教育でダメにするのが洗脳」とか「本人のためを思ってするのが教育で自分のエゴのためにするのが洗脳」と言う判別法もある。この基準で明らかに教育になる事項や明らかに洗脳になる事項も多いものの、依然として判別できない場合もある。例えば儒教に基づいた滅私奉公を注入するのはどっちだろう。あるいは世間を渡りやすくするために「世間体第一主義」を親切で教える親の行為は教育だろうか。

判別基準についてさらに言えば、「選択肢を広げるのが教育で選択肢を不当に狭めるのが洗脳」とか「自ら選択できるようにするのが教育で選択方法を狭めるのが洗脳」と判ずればかなり深まる。だが依然として例えば、「人を生かそう」という教育は「悪人を殺してでも生き延びる」と言う選択肢を狭めてはいないだろうか。こう見ていくと、洗脳と教育の境目は意外と難しい。

いずれにしても人が成長する過程において、自然な成長は理想かもしれないが待てられないし、今までの人類の蓄積資産を無駄にすることになるので、何らかの教え込みは必要だ。だが「強制＝洗脳」とするならば、大多数が嫌がるけれども強引に自由を奪って教え込む義務教育だって洗脳ということになってしまう。楽しいはずのゲームだって、実は教育がないとプレイの仕方をマスターできないのだ。

瞑想録(その13)

オーム真理教による麻原の脳波注入は、たとえ注入を受ける本人が希望したことであっても洗脳だろう。統一教会による集団結婚式だって普通に大多数の人から見れば洗脳だ。ならば正統派のキリス教が教える隣人愛や献金や伝道義務は洗脳ではないのか。洗脳でないというのなら洗脳か教育かは結局、その集団が正統派か異端派かという社会上の歴史認識と常識だけで決定されていることになってしまう。

イスラムでは女性がブルカやヒジャブを着るのは当然で、これを教えるのはまさに教育で、当の女性も「これはコーランの教えです」と納得している。豚肉の禁忌も同様だ。だがこれを我々自由主義の視点から見たら、明らかに男尊女卑であり無意味な食の禁忌だ。だがこう言っても彼らは納得しないだろう。それはこれらの行為が、イスラムにおける自由・平等・博愛であるからだ。もし同じことをオーム真理教がやったら、位置づけは洗脳になる。

先日国連が、「日本で男性しか天皇になれないのは男女平等に反する」という意見書を出そうとしたことがあった。幸いにして日本政府の努力によって、寸でのところで撤回になった。もし本当にこのような勧告が出たら、日本国民は怒るかあつけにとられるだろう。だがこの立場と先のイスラムの立場に甲乙をつけられるだろうか。ここに、建前は同じく「自由・平等・博愛」としながらも、その具体的内容は時として正反対になる難しさがある。

フランスの過激なパロディ誌のシャルリー・エブドがマホメットを馬鹿にする漫画を刊行して、これが原因でテロが起きた。多くの人は「どんな理由があろうとも暴力に訴えるのは民主主義ではない」と考えただろうが、イスラムにとってはマホメットを馬鹿にするなどどんな理由があっても考えられないことなのだ。それは天皇陛下をからかう漫画が出されたら日本人が怒りまくるのと同じだ。

エブドはそれでも辞めなくて、「ここで辞めたら自由の敗北だ」として、欧州諸国が王政を倒した原動力に風刺画があった歴史を根拠に挙げている。だがこの言い訳の時点で、「自由は当然だがその具体的ルールは俺たちが決める」とか「我々欧米がルールブックだ」と言うおごりが見える。イスラムにしてみればそれらの「根拠」は、向こう側の勝手な都合に過ぎない。根拠は科学の基本だが、実は根拠とはこれほどに自己都合なのだ。

私は別に、暴力を肯定しているわけでもなければブルカを推奨しているわけでもない。ただイスラムをして暴発しか対抗手段がないところまで追い詰めたのは、「正義は俺たちだ」というキリスト教側ののさばりがある。イスラムもイエスキリストをからかう風刺

瞑想録(その13)

漫画で対抗する余裕があるとよいのだが、現状の「キリスト教＝世界標準」の押し付けの下にあっては、それも難しいだろう。だいたい欧米キリスト教もさんざんギロチンとか植民地とか人畜非道をやっておいて、勝手に「そういう時代はもうやり終えたのでアウトです」もないものだ。

この教育と洗脳の境界線という問題はかなりファジーで、時代によっても変わってくる難しい問題だ。今の「郷土愛を育む」教育の強化の問題も、それ自体に反対する人はあまりいないだろうが、難しいのはその中身をどう盛るかによってそれは限りなく教育にもまた限りなく洗脳にも近くなる。先日とある校長が「日本の将来のために女性は子供を産め」と教壇で訓示して問題になったが、何も言えない教育現場も困るものの個人に家制度の復活を促すかのような教育も限りなく洗脳に近い。

洗脳か教育か、最終的には一人ひとりが自分で決めるしかないだろう。そして「私は真だ」のパラドックスを回避するにはできるだけ多くの世界を見ることだ。その証拠に洗脳集団は、信徒に他の世界を見させまいと必死で制限するという特徴がある。

9、寝込んだ時の心象

本日は、最近寝込んだときに発生した心象を取り上げる。その理由は不調の時は夢と同じく常識やルーチンが休むために、普段は表面化しない心象が現れる可能性があるためである。

もう数か月も前になるが昨年の12月の半ば、そろそろ寒さも本格的になろうというある晩のことだった。私は寝ている真夜中に急に腹が渋って飛び起き、トイレに駆け込んだ。こんな経験は初めてだったので何が何だか分らず、その時は頭がホワイトアウトしてしまった。特に従来だとトイレで用さえ済ませればすっきりしたところ、今回はそうでもないし体も重い。

頭がホワイトアウトすると精神的に無防備になるので、極めて危険である。こういう時はがむしゃらでも良いから対応策を急がなければならない。そこで私は当面の対策を打つべく、従来に経験していた類似の体調を思い出そうとした。もちろんサーベイするのは過去の心象のストックの内からであり、そのヒントは心象そのものと言うよりも、今回と似たような五感の感覚のありようとその組み合わせからである。

焦りもあってかほどなく、4つの可能性が抽出された。すなわち、①根を詰めすぎていて蓄積した疲労が腹痛の形で外在化した、②宗教画をたくさん見たので脳波が変調

瞑想録(その13)

をきたしてそれが腹に来た、③寒くなるにもかかわらず相変わらずの薄着薄布団で体を冷やした、そして④腹にのみ来る風邪をひいた、の4つの可能性である。

過去の体験全体から可能性を抽出する機構は総当たりだと思うのだが、何十億もある脳細胞の総当たりでは相当の時間がかかるはずだ。にもかかわらず、網羅しているかは別として主要なところを短時間で拾えたのには、それに対応した脳の検索構造があるということだろう。例えば似た性質は事前にひとくくりになっているとか、常日頃の無意識の脳サーベイである程度抽出ができていたとか、あるいは心象のタグ付けができていて走査し易いとかだ。

そしてこの当座は可能性をこれ以上絞れなかったので、この4つの可能性のすべてについて然るべき対策を打った。すなわち、①仕事(瞑想)をいったん休止し、②宗教画はすべて閉じ、③布団を増やし、④感冒薬と整腸剤を飲んで寝た。

結局病院には行かずに3日ほど寝込みそのあと徐々に回復したが、通常通りのペースでのライフワークの瞑想を再開するのには都合10日くらいかかった。そして軌道が元に戻ったところで今回の事象を振り返ってみた。基本的には病気と言うよりも平衡点のずれ、つまりホメオスタシスの変調であると思われた。ただそれが冒頭にあげた4つの可能性のどれであるかは判別できなかった。

判別できたほうが今後の対策をより効果的に打てるのだが、厳密に判別しようとするならば4つの可能性の1つ1つ日をずらして対策して経過を見るという科学的手続きが必要になってしまう。だが科学の常であるがとて待ちきれないのだ。そんなものどかしいことをやっていたら体はますます変になってしまう。しかもそのようなことをしなくてもしばしばその治る経過に沿っての五感でどの可能性が高いかを蓋然的に判別できることは多い。ただ今回はそれ以上絞れなかった。

次の事例は最近なのだが、花粉病をきっかけとしてやはり1日寝込んだ。やはり根を詰めすぎて頭が前のめりになっている、あるいは休もうとしても頭が空回転していることが気になってはいた。ここで寝込んだのは残念だがそれで頭の前のめりは取れかつ新たな心象も得たので、まるで無駄ではなかった。その時の心象とは脳の状態について、「高い位置にあるものが徐々に低いところにカームダウンしてきている」との動的な心象が脳内に見えたということだ。

脳空間はアナログ集合(形による認識)を基本とした非次元空間なので、我々の住む3次元空間のように「高い・低い」とか「遠い・近い」とかはない。少なくとも一意的には

瞑想録(その13)

言えないはずで、だからこそこのアナログ空間は悟りの空間でもあるのだが、なぜかこの件に関しては「高いと低い」が感じられたのだ。

それとこの寝込んだ日に、実は私には外出する予定があった。そして朝から昼そして午後に至ることにより徐々に、その外出できる可能性が連続的かつ単調に減っていくのが脳内で見えた。その減り具合はあえて言葉にすれば「もしかすると」「あるいは」「ちょっと」「やっぱり」「だめっばい」「もう無理」と推移していくのだが、脳の中ではある意味時間軸があって、そこを分銅が連続かつ徐々に移動していくような印象を受けた。

これも脳空間が非次元空間であるという特性を考えれば、直線は曲線でもありかつ場合によっては線ですらないものの陰であったりする。つまり脳内には直線という概念も連続的に移動すると言う概念もないはずなのに、なぜか連続の直線だったのだ。この辺は脳空間の心象が外的な諸事象のモチーフ(形や要点)を抽出した上での写像となっているので、あるいはそういうありえないことも例外的に見えたのかもしれない。

以上の2つのエピソードは、心象の総合的なトポロジーを見出すヒントになりそうと感じたので列記した。もちろんこれはほんの垣間見た程度であって、心象の実際のトポロジーはもっと複雑奇妙である。

10、アマチュアリズム万歳

世の中の社会システムの基本的な方向はヒラの大勢の専門屋をメインとしてこれを会社等の組織で統制する形、つまり縦と横の分業である。知見の爆発的増大と言う現状に対応しようとすると、これ以外に取り得る形はない。当たり前のことだが一人が一生の間に使える時間とリソースは有限だからだ。例えば患者にしてみれば心臓専門医が脳外科も兼ねてくれるよりも、心臓に専念してその代わり確実に治療してくれるほうが余程ありがたい。

この結果一人一人は極めて偏った常識の中に置かれ、かつ何人(なんぴと)も組織の指示命令系統や社内規則に従属させられる形をとる。この偏りと従属はやむを得ないとはいえその一人一人ひとりの発達や成長に極めて不自然で、自然体としての生身の人よりも部品や奴隷に近い不自然な態様である。しかし世の中の潮流には逆らえない。

瞑想録(その13)

そこで、体よく使えることよりも自分の自然さをはるかに重視する私は、世の中の潮流に逆らって、あえてアマチュアリズムに生きている。アマチュアとは要するに勝手気ままな食いかじりであり、現代では役に立たない放蕩息子の代名詞になっている。だが世の中のどんな分野でも、事の始まりはアマチュアリズムであったではないか。実際にダビンチやデカルトの頃は一人が何でもやったし、彼らの行為と成果が元になって徐々に分野が分化していった。「初めに専門ありき」ではないのだ。

この歴史的事実と現状のかい離は何を意味するか説明しよう。世の中が従来の延長しか望まないのなら「専門統制主義オンリー」で結構であり、専門家のすべきことは自分の興味や特性に関係なくその分野の過去の成果の型通りのパターンに自分をはめ込むことである。分野によってははめ込みだけで30歳の旬を超えてしまっていたりするのだが、運よくそれでもまだへこたれていない人がその先にもう1つくらい成果を追加するという形で世の中はまっすぐに「進んで」いく。そしてその「追加した成果」とは決まった路線の延長にあるのだから、あなたがやらなくてもいずれ誰かがやることなのだ。

こういう観点からアマチュアリズムを見てみよう。ここでアマチュアは勝手と言っても単に引きこもっている人は含まない。ゲームでも良いから自己実現のために様々に模索している人々だ。こういう人が食いかじりでたまたま何か新しいことを見つけたとする。ここで新しいこととは学問成果などと言う狭い範囲に限定せず、新しい絵画の技法でもゲームの創作でも新規ビジネスの創発でも何でもよい。つまり既成概念での「すぐに役に立つ」などもってのほかの広い基準で見て、何か新しいことという意味だ。

現実的にはその「何か新しいこと」の多くは、二番煎じだったり面白くなかったりするだろう。だがそれにもかかわらずたまにあるいはまれに大化けするものが出る。そしてそれこそが世の中の方向を真に変えていくのである。その思いついた人は、先日まではニートであったとしても今日からは人類の偉人なのだ。人を評価するとは多分にこのようなものであって、目先の功利主義にとらわれた文明は早晚行き詰まって破滅する。

世の中には「器用貧乏」という言葉がある。何でもできる器用な人が意外と評価されないという社会現象を表現した言葉である。そしてアマチュア気質の人には器用貧乏が多い。芸能界に例えれば渋い主役専門の三船敏郎は偉大な専門家で、何でもできて面白いグッチ祐三とか関根勤とか出川哲郎とかはその多芸のわりに笑われるだけで三船ほど尊敬されていない。

瞑想録(その13)

これ自体は歪んだ社会評価ではあるが、アマチュアたるもの社会評価などを気にしては自分の能力を十分に発揮できない。評価など気にした段階で既にアマチュアではない。単に専門家でないだけだ。真のアマチュアだったら2番煎じも恐れずに己の興味の赴くままに何にでも噛みつかないと居られないはずだ。

最近美術雑誌を読んだところ、アートの世界でも組織化が進んでいるという。村上隆さんなどが良い例らしいが、一人で描くのではなく、彼の周りにはもちろん彼の画風に賛同した上なのであろうが、アートディレクターとか舞台制作者とか、さらには経理や営業や宣伝部員までいる。そしてその人たちがどういう統制組織と賃金構造で働いているのかは知らないが、事実上数十人のプロジェクトとして動いているのだという。

今のところ幸いに、そのプロジェクトが中心画家を過度に束縛するとか、あるいは儲け第一主義で組織内にいじめがあるとかいうことは聞いていない。またディレクターとかプロデューサーとかキュレーター役の人たちは、「画家落ちこぼれ」ではなくて最初からアートマネージの専門家を目指してなったということだから安心だ。だが世の中の今までの組織の進化と変遷を振り返ると、こうして自主的に始まったものがいつの間にか経済社会にすりつぶされて、儲け第一主義と社畜の集合体に「進化」している傾向が見える。

アート産業の興隆が新しいジョブチャンスの提供だったら結構なのだが、行き過ぎて単なる産業の一つ、つまりアーティストもサラリーマンの単に一類型と言うところまで行ったらこれは怖い。実際最近話題のニュートリノ実験施設や重力波検出施設も事実上は工場で、いわば「学問産業」なのだ。その組織の締め付けが嫌で抜け出した研究員を、私は知っている。

と言うわけで、資本の寡占化と同様に嫌でも社会的必然である「才能の産業化」を憂えるのも結構だが、天下国家に関わりたくない私は今日もアマチュアリズムで気ままに生きるのだ。

11、脳空間とネットワーク

脳の中で個々の心象がどう分布しているか、そしてその空間は総体としてどのような形をしているか、これは当ブログのキーワードである「素朴な疑問と意外な気づき」の中でも特に重要なテーマで、今までもしばしば取り上げてきた。

瞑想録(その13)

そしてその空間は少なくとも平面や立体のような次元空間ではない。つまり脳空間として想定される「アナログ空間」から見ればこれらおなじみの次元空間は、単に特殊例に過ぎない。従って次元空間を暗黙の前提として発達してきた数の体系や四則演算、さらには合同や相似等のユークリッド幾何も、さらにはこれらの総体である現代の数理科学も、あたかも定理がたくさん出やすいように意図的かつ人工的に作り上げられた特殊な存在である。そしてその特殊な世界の内側できわめて内向きに蠢動しているのが、今の数理科学者である。

この現代数理科学の脳空間というより広い視点からの客観的位置づけはどうかだろう。仮に脳空間が一般的過ぎてほとんど新たな定理をも見いだせないような規則性の乏しいものであったとしても、物事を観ずる視点としては人の感性のバランスの取れた発展のためには重要であるに違いない。脳空間の蓋然定理が導出されれば、さらに良い。

アナログの視点あるいは脳の心象空間とは、端的に言えば事象を点としてではなく形として捉える、人間固有の本能及び能力のすばらしさの表れである。一言でいうと、現代の数理科学のキーワードは「点」であり脳空間のキーワードは「形」である。形を形として捉える。先ずは輪郭ではあるが目前の存在を「トラ」であると認識して回避する、あるいは相手のやり口を「ワナだ」と概略認識してとぼける、「形」にはものの形だけでなくより広くモチーフを含む。この能力は自己保全に決定的と言う意味でまた美しさを楽しむというより崇高な目的のために、点など問題にならないほど決定的に人に本来的である。

だがその脳空間は非次元空間である以上に、その詳細はまだ茫洋としてつかめていない。以前にはカラーピッカーと色心象の例を用いた。だがその後の瞑想で、特にそのプリミティブな起源が五感の刺激とその脳内でのマッピングと意味処理であるという理解に至った。すると脳空間内の個々の心象とはカラーピッカーのように密に隣接しているというよりは、むしろ空間上を離れて浮遊しているものとも思えてきた。そしてもし浮遊しているのなら、空間と言うものを厳密な意味で定義できるのか。むしろネットワークモデルの要素を取り入れるべきではないかとも思えてきた。

そのような心象の分布を考えるための例は世の中にたくさんあるのだが、本日はとりあえず、①陶磁器の分布、②人々の分布、③料理の分布、の3種を考えてみる。本来はこれらをすべて含んだ「存在の分布」とかそのエッセンスをとらえた「自由・平等・博愛の分布」、あるいはものでなくその性格を抽象した「美しいということのあり方」等も考慮に入れるべきなのだが、これらは将来としたい。

瞑想録(その13)

志野と織部、代表的な焼き物の様式である。志野は美濃焼の1分野で赤土を焼きしめた上に単純な線を入れてその上に長石釉を掛けた、肌色で白掛けの色合いとボツボツのテクスチャーが特徴である。だが今述べた工程で焼けばどんなものでも志野かと言うとそうではない。もちろんそういうものも作ろうと思えば技術的には可能なのだが、何かしっくりこない。もはや志野ではなく、美のありようも中途半端だ。

腰が広って高台は浅いような横から見ると椀と言うよりも長方形に近い造形や、背の低い筒型を基本としながらもあえて多少のゆがみを入れて人工的なわざとらしさつまり対称性を減らした素朴な造形、こういった要件も充足して初めて志野なのだ。なぜこの形に落ち着いたのかは美学と言う極めて高度な認識の問題があるのでここでは深入りしないが。

他方で織部は同じ美濃焼ではあるが造形や基本理念はかなり違って、釉は緑色、形もできるだけ変形しているものが好まれて代表的には楓の葉とか割れた柘榴のような形、そしてこの形の土を焼しめた後に緑釉に器を斜めに半分ほど浸して、残り半分にはやはり丸とか井桁とか、幾何的な単純な文様を入れるというのが一般的である。

志野や部の表面に仮に細密画を施しても、見えないし雰囲気合わなくて、これはあり得ない。また、同じ美濃焼きと言いながら「長石釉と織部釉を混ぜて掛ける」と言うのもあり得ない。織部の形に作って長石釉を掛けるということも見ることがない。なぜないかと言われてもそれは美しくないからだ。そぐわないのだ。ものには組み合わせとか適材適所がある。「やはり野に置けスミレ草」と言うわけだ。

こういうわけで志野と織部は全く交わらないので、志野と言う心象と織部と言う心象は離れて浮遊していることになる。美濃には志野と織部以外にもいろいろな様式があるが、それらもみな美濃と言う大きなしかしもはや薄い心象の中でそれぞれ浮いている。特に最近増えている前衛陶芸が美濃の心象を広めかつ薄める傾向にある。なお志野の内部あるいは織部の内部だったら、密に詰まっているとってよいかもしれない。

ちょっと脱線する。脳空間には数も演算も少なくとも従来の形では存在しないので、関数も方程式も作れない。行列式もない。だが関数はなくても微積分の考え方は応用できる。例えば志野茶碗で模様をもう1本増やしたら(減らしたら)全体としての美しさはどう増えるか(減るか)、これは微積分(差分と増分)の考え方である。

瞑想録(その13)

人(知り合い)の場合や料理の場合も、似たようなものである。例えば100人知り合いがいてそれぞれに個性があるが、その個性が似ている人はいても隣り合う人はいない。「2人の中間」と言うのは場合によっては概念できるが常にではない。むしろ「良いところ取りができないか」とは考えるであろう。料理にしても「ラーメンとサバ味噌の中間」と言うのは考えにくいし、無理をしてもまずいだろう。

このように心象間のすべての間に連絡や遠近がないということは、その面では幾何と言うよりもネットワークに近いが、志野や織部の広さを持った存在感を見ると幾何の側面も捨てがたい。この先は追々考えることにする。

12、アート宝库

私はライフワークの「素朴な疑問と意外な気づき」の一環として、現状の点からなる有次元空間の数理科学の裏バージョンとしての「アナログ集合」及びこの有力な応用先である脳空間内の心象作用について瞑想している。アナログ集合とは端的に言えば事物の形やモチーフ(全体観)を第一義的につまり人の能力に素直なままに把握することであるので、どうもこの対象は数理科学よりも美術や芸術等のクリエイティブ系のほうがしっくりくるような気がしてきた。

と言うわけで最近私はにわか勉強かつ独学でアートの世界を放浪しているのだが、何せ私はこの分野に才能が全くない。学生時代の美術、技術家庭、体育と言った実技系の通信簿の点数は、いつも5段階で2だった。そういう訳なので本当は自分でアートを制作してみたいのだが、現実はおっぱら鑑賞専門と言うことになる。

こうしてにわかにアートに目覚めて、気づいたことがある。この世の中は町だろうが店だろうがどこを見てもアートのオンパレードでこれでもかと言うほどにアートだらけ、全部鑑賞していたらいつまでも目的地に辿りつけないほどなのだ。家、車、花壇、標識、看板、店構え等々、アートの要素のないものはない。しかもこれらのほとんどが名もない人たちのちょっとした工夫と考案であり、用が済めば容赦なく捨てられていく。

極め付けがスーパーだ。私は食べ物には興味があるから今までもスーパー内の商品陳列はそれなりによく見てきたつもりだった。だが無数の商品列をパッケージアートの視点から見直してみると、これらがいちいち素晴らしい。購買欲をそそると言う本来の目的はもとより、アートとしても簡単に打ち捨てられない高貴さを有したもののばかりだ。しかも数が無数にあってかつ回転していくということは、これらのポップアートを考案するかなりの数の無名なアーティストが裏に居て日々制作を糧にしているということだ。

瞑想録(その13)

私自身は長い間技術系の社畜だったので、多数の無名な社畜の悲哀とか馬鹿らしさやずるさについて結構書いてきた。だがアートの世界もごく一部のラッキーな個展を開ける人々を除くと、クリエイティブとは言いながらそのほとんどが無名の兵隊としてノルマとしての生産活動に従事を余儀なくされているのだ。しかもその創造したデザインの寿命は、その卓越差にほとんど依存していない。該当商品が売れ筋でなければ1月で消滅することも珍しくないのだ。内輪仕事ですりつぶされているのは、どうやら技術社畜だけではないらしい。

もっとも商品を買う当方としても例えば袋麺を買うたびにいちいちその袋のデザイン制作上の苦労や経緯などの蘊蓄を垂れられても、疲れてしまっても付き合いきれない。つまりデザイナーが無名のおかげで、買う方も円滑で安楽な人生を送られているのだ。まあその意味ではその袋麺の製法を開発した蘊蓄をいちいち技術社畜から聞きたくない、つまり頼むから無名でいてくれよと言うのと同じだが。

昨日もお使いの帰りに近所の家々を見てきたが、家そのもののデザインはもちろんのこと壁や屋根や扉や梁や塀のちょっとした手触りやテクスチャーにも1軒1軒異なる工夫があって、こんな何気ない目立たない部品にすらデザインの苦労の跡がうかがえるのだ。私は人類を、「かくも偉大だったのか」と見直し驚嘆してしまった。

ところでアート系の月刊誌に目を通すと、どうも最近「インスタレーション芸術」と言う分野が興隆しているらしい。これは絵とか彫刻とか言った従来の単品芸術の枠を超えて、「様々な芸術品の相互配置や空間のありようそのものを直接かつ全体として1つの芸術と見なそう」という一種の総合空間芸術なのだ。この傾向により、従来は絵画等を単に並べて解説を入れるだけの展覧会も、最近は専門のギャラリストが脚光を浴びていて「どんな作品をどう陳列するか」が十分立派な芸術になってきている。

もちろんこの手の芸術にも新たな課題はある。先ず絵や彫刻と違って保存が難しい。多くが1回限りの芸術で、保存と言っても写真に撮っておくとか設計図や概念図を残しておくくらいしかない。第2に売り買いの問題だ。スペースの芸術であるから個人が買うにも置き場がない。美術館とか企業体なら買えるかもしれないが、どう値段をつけてどう権利保存をするのか。とは言え保存のために芸術があるのではないから、インスタレーションは今後も興隆するだろう。

このインスタレーションの視点で近所の街並みを見直してみると、その1軒1軒は個人単位で勝手に建てたものだろうが、結果として「これもインスタレーションだ」と言える

ほどの街並みになっているような街並みの存在に気付くようになった。つまりインスタレーションは一面偶然の芸術である。と言うことは素朴な自然の中に芸術を見出す自然派や民芸運動や常民学の立場からは最も人工性の少ない、少なくともそういう可能性を秘めた「究極の芸術」あるいは「最後の芸術」とも呼べるのではないか。私もこう言った人の手あかの離れた町や野山を見たくて、かつてウォーキングに精を出していたのかと思えるほどなのだ。

いずれにしても世の中に結構存在する名もなきアーティストさんたち、やはり名もなき技術社畜の私があなた方をひそかに応援していますよ。

13、裏技と天才

世の中には「裏技」と呼ばれる意表を突いた超便利な技があつて、その意外さと気付きの鋭さには驚嘆する。ある意味で人の知恵の究極と言える。そんな裏技の例をいくつか、下記のサイトから拾ってみた。

<http://matome.naver.jp/odai/2137852099253116701>

- ・カイロに約 30 秒間息を吹きかけると早く暖かくすることができる。
- ・大根おろしの汁に安い肉を約30分漬けると高級肉のように柔らかくなる。
- ・バナナを1本ずつビニール袋に入れて冷蔵庫に保存すると傷まない。
- ・使い切った歯磨き粉は端を持って10秒くらい振るともう5回くらい使える。
- ・ブーツの中に10円玉を5枚入れ1日置いておくとブーツの臭いが消える。
- ・ゴム手袋を付けてじゅうたんをなでると、ごみがあつまり取れる。
- ・感熱紙のレシートの印刷されている面で爪を擦ると、爪が綺麗になる。
- ・温泉玉子を何回か振ってから割ると白身が殻にくっつかず綺麗に出せる。
- ・くしゃみが出そうになったら鼻の下を押さえると止まる。
- ・布に牛乳をつけてよく絞り革製品を軽く磨き乾いた布で拭くとツヤがでる。
- ・車内が暑いときに片方の窓あけてもう片方のドアを開閉すると涼しくなる。
- ・シュークリームを逆さまにして食べるとクリームがこぼれずに食べられる。
- ・みかん5個分の皮を電子レンジに入れてチンすると匂いがとれる。
- ・息をいっぱい吸い込んでとめるとお腹が鳴りそうになるのがおさまる。

これらの裏技はいちいち試してはいないが、まとめサイトにあるものなので冗談ではないだろう。でも冗談かと思われるほどその目の付け所や組み合わせ方が意外だ。一体発見者はこれらの裏技をどうやって思いついたのか、偶然かそれとも直感なの

瞑想録(その13)

か、摩訶不思議である。ものによっては後から理屈がつけられる裏技もあるかもしれないが、それはあくまでコロンブスの卵だ。

これらの裏技の発見者や発見方法は個々によって違うだろうが、このうちのどれか1つでも気付くには相当な知恵が要る。発見の瞬間を、その人の頭をがち割って見てみたいものだ。ただ惜しむらくはこれらの発見のご利益が家庭内のほんのちよつとしたことにあるだけで、そのために気づきがすごさのわりに過小評価されてしまうことだ。同じほど意外な気づきが例えば新規薬剤の合成経路についてであったなら、特許は取れるし学術上の評価も高く場合によってはノーベル賞かもしれないのに。

これらの裏技は見て分かる通り再現性があるから、その意味では科学である。ただしこれらの裏技の発見をもとにして学問が大きく系統的に展開する訳ではないので、これらを称して「学問である」と言っても現実にはあまり相手にされない。つまり芸術に例えれば、アートと言うより大道芸や雑技の扱いなのだ。

ここに重大なポイントがある。世の中には天才と呼ばれる人が何人か居る。例を挙げれば発明家のエジソンとか物理学者のアインシュタイン、最近の日本ならば作詞家の阿久悠さんとか作家の三島由紀夫さんとかだ。これらの人々の気づきや開いた新境地の広さには感心するし、現に一つの時代をけん引してきたという実績がある。しかし彼らの気づきの意外さが冒頭にあげた裏技より全く異質に高いかと言えば、意外さはさほど変わらないようにも思う。

結局裏技を思いついた名もない主婦と世界的に有名な天才との違いは、その気づきをきっかけにしてたまたまかもしれないが、①系統的な展開に至り、②人々に多大のご利益があり、③時代をけん引するほどだ、と言うまとまった実績が続くか否かだ。今はどこかのスーパーで大根を値切っているオバサンだって、気づいた裏技がこういう大展開の種であったらノーベル賞も夢ではない。逆にノーベル賞とは運の良い裏技だ。

ここで留意を促したいが、この一文は天才の称号の榮譽を獲得するための系統的方法論を論じているのではない。名声などつまらぬものだ。思うに結構多くの人が大なり小なりその人の個性の一環として天才肌のようなものを持っている。そして自分の才能を見出してその能力を発揮できれば、その人の人生は名声に関係なくてもさぞかし充実するのではないか。

例えば阿久悠さん、70年代の歌謡界を通して時代をけん引した。阿久悠さんの作詞法は彼の本望が作家になることただただあって、「とある典型的な一場面を切り取

瞑想録(その13)

るその切り取りのうまさと、その切り取った情景を言葉に変換するその卓越した変換能力」である。加えて「スター誕生」のような新企画により総合プロデュースと言う新分野の先鞭をつけた。これは今のツンクや秋元康に引き継がれている。

だから彼は言葉の天才であるが、その分野に自分の才能があることを発見できたのは彼自身の慧眼と努力の賜物である。また70年代と言う時代が彼のようなタイプのプロデューサーを潜在的に待ち望んでいたという、歯車噛み合いのラッキーさもあった。実際80年代になると阿久悠さんは作詞自体も続けていて賞もとったが、歌謡の傾向が例えばサザンオールスターズのような「感じたものを加工せずにそのまま垂れ流す」方向にシフトしてしまったために、阿久悠さんはもはや時代の牽引者ではなくなっていた。天才と言っても寂しいことに永遠のタイトルではないのだ。

ここで分かることは、天才肌の人が本当にその能力を生かして天才の充実した人生を送るには、①その分野が現に存在して自らそれに気づくこと、②系統的かつ連続的に成果にすること、③時代の変わり目をよく見ること、が必要だということだ。意外と大事なコツが、自己エゴにならないで時の流れに委ねることだ。阿久悠さんだって「どうしても小説家」と意固地になっていたら、成功しなかっただろう。

もちろんそこには運不運もある。もし相撲という格闘技がなかったら、横綱白鵬はせいぜい2流のプロレス選手で終わっていたかもしれない。あなたが誰の目にも天才ドラマーであっても、良いバンド仲間と巡り合わなければ単にダメンズの1パターンなのだ。だからと言って時代におもねりすぎて自分をなくしても、実力の発揮はない。この辺のさじ加減が難しい。

結局天才肌の人結構多くいるがそのほとんどはせいぜい裏技師で終わり、天才に大化けするには運が要る。そしてほとんどの運のない天才は、身丈に合った生活をするしかない。ノーベル賞と紙一重で悔しいかもしれないが、それが幸せというものなのだ。

14、タグモデル

昨日裏技について瞑想した折に裏技を総括して、「ひらめきは素晴らしいものの『思いつき扱い』で正当評価してもらえていない」とした。この判断プロセスを分析する。先ず個々の裏技は1つ1つが心象である。そしてそれらの総合的な性格である「素晴らしい割に尊敬されない」は基本的には個々の裏技の心象に付随したタグである。だがこ

瞑想録(その13)

う陽に記述されるほどに認識されるとこれ自体が、それは物の名詞でなくむしろ性格の形容詞なのであるが、これも立派に心象になる。

そして昨日の瞑想では裏技の不当な扱いについて、「芸術に例えればアートと言うより大道芸や雑技扱い」とも述べた。これはつまり、「ひらめきのわりに冷遇されている」という形容詞的心象が裏技だけでなく大道芸にも適用できるということだ。つまり大道芸にもやはり冷遇と言うタグがあり、冷遇と言う心象に注目すれば裏技も大道芸も共通のタグを持っている。そしてこの共通のタグにより、裏技と大道芸が同類項になっている。

初めに冷遇と言う形容詞的心象が形成された。続いてそうでなければ遠く無関係であった裏技と大道芸がずっと近接した。これは空間に特有の従来の幾何では、脳空間は空間を超えていて空間と呼べないことを意味している。距離や近傍系が原理的に定義できないからだ。これが既成の数学者の頭の中であり、脳空間をこう切り捨てて終わりにする。でも従来のすべての数学が「平面等の有次元空間と言うニッチな世界の中でちまちまやっている」という壮大な視点の形成に、脳空間に典型的に見るアナログ空間の存在は大いに役立っている。だから脳空間は空間の定義を拡張してでも、何らかの形で存在するとすべきだ。

もう一つ、タグも十分強く認識されると心象に「昇格」ということだ。「心象の心象」と言うのもありうるということだ。そしてこの新たな心象は元の心象が名詞的で新たな心象は形容詞的だから近くない。ただタグで関係しているのだ。ここでタグが心象に昇格するとはネットワークモデルの視点からすれば「ネットがしばしばノッド化する」ということであって、脳空間は空間のモデルだけでなくネットモデルの限界も超えていることを意味する。

結局脳空間と言うものは厳密には、空間モデルもネットワークモデルも超えて収まらない全く新しい対象・概念であって、タグモデルとして新たに構築されるべきなのだ。つまり個々の基本的心象はその多面性に応じて性格を象徴する多くのタグを持っていて、このタグ同士をきっかけとして心象同士がかい離結合しあうとする。こう言うと「脳内作用は結局連想だ」と昔からの言い古しを再言及しているだけではないのかと言われそう。確かに心象の遷移には連想の面はあるが、実は連想よりもずっとダイナミックで意外性に満ちている。その理由は脳細胞のシナプスの発火に偶然性があることと、同じシナプスが別の目的のために別のつながりで何度も再利用されるためだ。

瞑想録(その13)

ところで冒頭に挙げた新しい心象の「ひらめきのわりに評価が低い」、これ自体は形容詞的であるが複合的でもある。「裏技」、この単語はその中に多くの個々の裏技を含むものの、それ自体は単純に単一の心象である。ところが今の形容詞心象は「ひらめき」と「評価が低い」からなる複合的な心象、つまり心象としては単一であるもののより基礎的な複数の心象の組み合わせでできている。この形態はどう考えるのか。

組み合わせでできるのはここも基本的にタグである。だがもし単にタグ連想による連結なら、「ひらめき『だから』評価が低い」と組み合っても問題ないはずだ。どうして組合され方が「にもかかわらず」でなければならないのか。その秘密はタグでなく複合結果そのものにある。「ひらめきだから評価が低い」つまり「良いものだから安い」、これではおよそ意味をなさず心象を形成しない。読んだ人は「入力ミスだろう」と思うことだろう。つまりタグがかみ合うからと言ってどんな組み合わせでも心象を形成するわけではないのだ。

先日の裏技の例に帰ってみよう。ここで裏技をあえて取り上げるのは裏技と言うものが「一見信じられない」という意外性を持つからだ。つまり心象を「形成できるとできない」の瀬戸際にあるために、考察対象として都合がよい。どの裏技でも良いのだが、「温泉玉子を何回か振ってから割ると白身が殻にくっつかず綺麗に出せる」を詳細に見てみよう。これは10個くらいの単語の組み合わせになっていて「ひらめきなのに評価が低い」という心象よりも構造はずっと複雑だが、原理は同じだ。トータルとしてそういう境地がイメージできるような組み合わせになっているということだ。

例えば先の例を単語は変えずに「温泉玉子と白身の何回をくっつかないから振った」などと組み合わせても、その真偽以前に何をどうしろと言っているのか全く分からなくて心象の形成のしようがない。ここで心象を形成できるか否かは基本的に、赤ん坊の本能の時以来経験を通じた学習の積み重ねによるものである。だから人としての共通要素と個人単位の揺らぎに分かれる。

あとはどんなに長くなろうと同じだ。阿久悠さんの20行くらいの「ペッパー警部」も、バカ長い「カラマーゾフの兄弟」も、キャッチコピーの「触ってごらん、ウールだよ」も全部同じだ。どんなに短くとも長くてもモチーフがある限り心象だ。翻訳や要約や解説の使命もこのトータルとしての心象をよりの確に伝えることにあるのだから、直訳よりも比喩の要約のほうがしばしば優れていたりする。絵画理解や音楽理解についても基本原理は同様だ。納得に証明は不要である。

科学者ならば「こういう心象の打ち続く生起は脳のシナプスとニューロンのどういう励

瞑想録(その13)

起機構によって発生するのか」と問うだろうが、私は科学者ではないので知らないし科学者の土俵に乗りたくもない。

15、笑いの構造(その1)

人の心象や能力を①自己保存に関する下層部分と、②喜びや感動に係る上層部分に分けたとき、この上層部分の典型的な心象もしくは反応が「笑い」です。笑いの構造は学問的には複雑すぎて梅原猛先生でもあきらめたほどだそうです、ここは瞑想的方法によって笑いの構造を実例により見てみましょう。

<笑い1> 学歴詐称で実は高卒だった日本人のショーンKの英語の発音が、本場のアメリカ人のデーブ・スペクターの発音より流暢だった。

<解明1> 本場者のデーブの発音が嘘つき日本人のショーンよりも下手だった、このお笑いはショーンが注目されたときに流れたものですが、実はこの笑いの主役はデーブのほうであって、デーブが日本ボケしていかに英語がダメになったかを笑っています。デーブに気が付いたこのお笑い作者の気づきもすごい。

<笑い2> 保育所騒動のさなか、保育士が自分の子供を預ける保育所を見つけられなくて結局退職した。

<解明2> ブーメランが自分のところにヒットした。保育所騒動も首相が国会で答弁するほどの大騒ぎになっていますが、これでは本末転倒で限りなくブラックユーモアです。素直に笑えません。

<笑い3> ロシアには日本の中古車がたくさん輸出されたが、ある時「北方領土返還！」と書いた車がロシアを走っていた。

<解明3> 街宣車が輸出されてそのまま走っていたのでしょう。ロシア人は日本語が読めないとはいえ、かなり間抜けなシチュエーションです。利敵行為そのものですね。プーチンに見つかったら銃殺刑です。

<笑い4> 「君一人いなくても会社は困らないから安心して有給休暇をとれよ」「いや、私が不要だと言うことがばれてしまうのが怖いのだよ。」

<解明4> 今の大会社でもリストラが日常茶飯事の時代に、これも素直に笑えません。会社が傾くと、うつ休暇の社員たちがどっと「治りました」と言って復職するそうです。

<笑い5> 「うちは大きいことは全部僕が、小さいことは嫁様が決めているのだよ」「へえ、すごいね」「でも今までに大きいことは1つもなかったのだ。」

瞑想録(その13)

＜解明5＞結局この旦那様は、さも大きいことを言いながら、決定権はまるでないダメおやじだったということで、その落差が笑えます。

＜笑い6＞(病院の待合室で)「最近与助爺さんをお見掛けしないわね、どこかお悪いのかしら？」

＜解明6＞おばあさんの心配と同情が本気なら、このおばあさんはもはや痴呆です。病院はどこか悪い人が来るところでしょう。

＜笑い7＞「昨日は何というホテルに泊まったの?」「シューシャインホテルです」「お前は靴磨きか」。

＜解明7＞本当は「サンシャインホテル」だったのです。

＜笑い8＞冗談は顔だけにしろ。

＜解明8＞これは自分が言われたら怒るでしょうが、他人同士のやり取りなら笑えます。「顔が冗談」、これよりきつい不細工の表現はおそらくないでしょう。

＜笑い9＞(マネージャーがウエイトレスたちに)「今日はいつも以上の笑顔で頼むよ」「誰かVIPでも来られるのですか」「いや、肉が固いのだ」。

＜解明9＞落ちが現実すぎて、その落差に笑えるネタです。

＜笑い10＞あいつは右目で泣いているが、実は左目で笑っているよ。

＜解明10＞典型的な二重人格で、「人の不幸は蜜の味」をやっています。本当は顔面神経の構造上右目と左目はほぼ同様にしか動けないのですが、この表現はできない技で表現することによりそのブラックを大げさに出しています。

もちろん笑いの種類はもっと多種多様なのでそれが解明しにくい理由の一つなのでしょう。ですがこういった笑いの例を見ると先ず見える特徴として、①理想と現実の大きな落差、②他人がコケにされている状況、が見て取れます。他人がコケにされているのが笑える、つまり他人の不幸が面白いという状況は、「人の不幸は蜜の味」的な不健康な精神を連想させます。ただし笑いの場合は状況を軽くして、むしろ緊張をときほぐす方向に働いています。

いま指摘したように笑いのさらなる特徴として、③緊張をときほぐす、④アイデアや気づきが卓越している、が挙げられます。ですから笑いをとれる人は頭が良くないとできません。ではいわゆるFランクの大学には笑いはないのか、あるいはお笑い芸人は全員が一流大学卒なのかと言うと、そういうことはありません。お笑いには推理力や暗

記力とは異なった、言わば機転力のような形での頭脳が要求されます。先生や同級生にあだ名をつける能力に近いです。そして機転力は本来学問や仕事や芸術でも必要な能力なので、機転力のないインテリは仕事できません。

最後に笑うという心象もしくは反応ですが、作動は基本的に瞬時です。内容を脳空間で吟味してからと言うことではなく、ほぼ瞬間的に笑いが出ます。もっともこれは笑いに限らず、気持ち良い、おいしい、面白い、嫌だ、気持ち悪い等、すべての感情についてそうであって、中間に思考時間を挟みません。その意味では本能に近いけれども、内容的には極めて高度な判断をしています。この不思議については追々瞑想していきます。

16、汎アート主義

最近アナログ的な「形」(モチーフ)に注目しているので、「美術手帖」とか「芸術新潮」と言った美術月刊誌の最近の号に目を通して近年のアートの動向を楽しんでいるが、その日々の進歩には目を見張るものがある。半世紀前に著名な変人芸術家で人相にもその性格が表れていた岡本太郎は、「芸術は爆発だ」と言った。だが現在の爆発に比べれば彼の爆発など、線香花火に見えるほどだ。

私はもともとアートを見るのは好きで、良く美術館に通ったり美術本を閲覧したりしていた。最近も北大路魯山人とかティンガティンガとか安田靫彦とか友禅染とかを鑑賞する機会があって、「なかなか素晴らしい、これはもう芸術の極致だ」と感動したものだ。だが現在進行形のいわゆる実験芸術は、こんなものはもはや問題にしていない。

評価の定着し先達の作品群や手法を、決して批判しているわけではない。だが現代芸術はもはや、「～派」などと位置づけがされて展覧会が開かれ全集が発行されるような人々は眼中にないといった感じなのだ。旧来のおとなしくて行儀が良い、絵画とか彫刻とか織物などと言った古典的分類におとなしく収まる芸術は、今やむしろ普段は家庭の主婦をやっている素人の愛好家集団が、かろうじてその芸風を引き継いでいるかの感すらある。

分類すら拒否した現代アートの特徴をまとめると、①個々の絵画や彫刻はもはや「作品の一部」に過ぎなくて、それらを含めた配列空間そのものを見せる、②配列空間の部品は旧来の芸術品に限らず、むしろ廃材とか生活用品と言った従来は忘れられていたようなものが多い、③一応全体的な体裁はつけているものの、ありのままを基本にする、④計算機、動画、音声、パフォーマンス、他媒体の電子変換、更には化学

瞑想録(その13)

反応と言った近代技術をすべてアートに組み入れかつ総合化している、⑤観客もただ見るだけから観客参加型の観客も素材の一つと言う方向が見える、と言った特徴がある。

最近見たこの手の若手公募展でも多少の整えこそあるものの、①台所そのまんまとか、②作業中の雑多な机そのまんまとか、③解体中の木造家屋の内臓丸出しそのまんまとか、④雑多な町の車や通行人のどうと言うこともない描写そのまんまとか、⑤究極には芸術家が作品で飾った店で焼肉をして客が食べる行為全体と言った感じだ。最近までアートとは思わなかった、垂れ流され捨てられていた景色や雑音や雑踏がそのまま作品になり、かつ入賞の榮譽に輝いていた。

確かにこういうことさらに作らない雑多なものに美を感じるという傾向は、例えば民芸運動などの動きにおいて過去にも見られたことだ。だが決定的に違うのはこれらの「風景」を、言葉とか概念とかの理性作業を一切除外して、人を完全な感情動物にして印象を直接五感で感じることを重要視していることだ。そのためにアートはむしろ「作るべきではない」という悟りの結果として存在している。「作らない」の究極は、普通の景色のありのままである。裏町の古びた居酒屋が変に好かれるのと、通底した選好である。

私自身は好奇心が強くまた「素朴な疑問と意外な気づき」がライフワークであるので、最近のアートのこういった傾向には驚くよりも「やっとアートもここまで来たか」との感慨が深い。本来的にアートと理性は排反事象だから、実は芸術学部の基本テクの学習すらも才能のぶち壊しであるはずなのだ。だが当の芸術家集団が「やっとここまで気づいてくれたか」と言う感慨である。ここまでくるとある意味すべてがアートであり、「もしアートでないものが1つでもあるなら教えてください」と言う気になってくる。

私自身最近まで趣味はウォーキングで町や野山を歩き回っていたが、別に体操をしたかったわけではなくてむしろ何気ないありふれた街並みや野山の構造と言うアートを参加型で体験していたのだと気づくようになった。そしてしばしば道も何もないようなところに入り込みたい衝動があったが、おそらくそういうところにこそ最もディープなアートがあると無意識に気づいていたのだろう。

最近はまだガイドウォークの名所めぐりは行き尽くした。今やっていることは目立たない中小の美術館博物館巡りをその近隣の区役所食堂や学生食堂と組み合わせてその間をウォークするという、手作りの「複合ウォーキング」になっている。そしてこういう

瞑想録(その13)

折つまりさもなければ一生通らなかつただろう無名な街並みに、むしろアートを感じるのだ。

そして私はやはり物心がついた時から、何気なく存在していて誰も不思議に思わないようなもの、ちょっとした公民館とか山道の途中の大石とか町はずれの丘とかについて、「なぜこんなものがここにあるのだろう」と、誰もが当たり前としか思わない事物に素朴に不思議に感じていた。そして頭の構造がもともと理系の私はその存在理由を何とか証明しようと、今まで無意識に努力していたように思う。

ところが最近この手の、特にインスタレーション・アートと呼ばれる一連のアート群を見て、これらの「不思議なもの」はアートのために存在していたのだと気づくようになった。つまり素朴な疑問について解決するのは常に証明や合理化とは限らなくて、「アートのためにある」の方がよっぽど納得できる場面が多いということに視野が開けた。

公民館は40年もすれば建て替えられるだろう。大石だって道路の拡幅で今はないかもしれない。火事で燃えてしまった小屋もあるだろう。だがなくなること、変化するもの、1回限り、保存できない、これらも超現代的なアートなのだ。

かつて「モダニズム」で究極まで来たと思われたアートが、ポストモダンと言う一種の復興主義で新次元の出発を遂げたように、今の「ありのままアート」、私なら「アナーキーアート」とでも名付けたいが、これもいずれ行くところまで行って飽きられて別の物、いわば「ポストアナーキー」にとってかわられるだろう。その具体的な姿を見てみたいものだ。

にもかかわらず私は今のアートのダイナミックな潮流を歓迎する。少なくとも自分の飯の種だったサイエンスの行き詰まりとの対極的な大きなうねりに、感動するのである。

17、夢と解釈(その5)

日常と常識のふたを取り払って素の心象を探るために、本日も最近見た夢をいくつか取り上げます。

＜夢1＞娘を連れて場末の小さな劇場に行った。そこは実はお化け屋敷だった。ろくろ首とかフランケンシュタインとかが次々に出てきて、ほかの客や特に若い娘たちはキャーキャー言って逃げ回っていた。だがうちの娘だけは「わあ、クール、大好き」など

瞑想録(その13)

と抱き着くとか、幽霊のお面をはいで「やっぱり人ではないか」などと言って笑い転げている。

＜解釈1＞うちの娘は女子力が零の豪傑ですから。それにしても仮面を剥ぐというのは誰にとっても快感ですよ。

＜夢2＞私は棒高跳の選手だった(ちなみに本当の私の運動神経は零です)。そこに変なおじさんが重いカメラを提げて現れて、私が棒をクリアする写真を撮りたいと言う。何度か飛んでやったがおじさんは、「どうもうまく撮れないからお前が俺の写真を撮れ」と言う。おじさんが倉庫からナナハンで飛び出してくる場面だ。私も何度やってもうまく撮れない。おじさんが「おいそこの若いの、いったい何をやっているのだ」とすごむから、「何を偉そうにこのオッサン」とか思ってよく見ると、それは石原裕次郎だった。

＜解釈2＞まあ最近裕次郎について読んだということもあるのですが、私は裕次郎世代ではないので彼に全然しびれません。にもかかわらず尊敬していない人に偉ぶられるのって、不愉快ですよ。でも相手が裕次郎さんだと、なぜか口答えできずにすくんでしまう。

＜夢3＞私はおなかが痛くて病院へ行った。すると「虫垂炎なのですぐに手術をします」とのこと。「おかしいなあ虫垂炎なら子供のころ手術したけどなあ」とか思いながらも、「会社を1週間も休めるなんてラッキー」と思い直した。すると医者「手術中に暴れるといけないから」という理由で、私をベッドに荒縄でぐるぐる巻きにした。私は急に便意を催したのでその旨を伝え、「逃亡する恐れがある」という理由で看護婦の監視付きでトイレに行かされた。恥ずかしいながら唸ると看護婦が、「立派なうんちだから標本にする」と言い出す。結局手術はどうなったのだろう。

＜解釈3＞典型的な夢の形だと思います。夢はいきなりジャンプするより何となく繋がっているのですが、場面が変わるごとにいつの間にか最初の出だしは忘れている。要するに人の素の発想は、科学や論文でないということでしょう。これからは芸術も、こう言う支離滅裂で良いのだと思います。

＜夢4＞私は友人と汽車に乗っている。ところがよく見ると友人は座席に座っているのではなく、窓枠に外からしがみついている。「危ないぞ」と声をかけたが友人は調子乗って、片手で窓枠をつかんだまま体を広げるとかのアクロバットをして得意顔だ。その友人を車内に引き入れようとする逆2人まとめて外に引き出され、その勢いで飛び込んだところが織物工場だった。そこで工場のオヤジが自作の、「生き物織」を自慢する。野鳥を捕獲してきて、生きたまま織物に織り込むというのだ。「お前も体験しろ」と迫られるが、怖くてできない。

瞑想録(その13)

＜解釈4＞何年か前に汽車の窓で悪ふざけをして、電柱に当たって死んだという愚かな若者が実際にいました。また織物も最近形の瞑想で注目していたところですが、どうしてこの2つが結びついたのか分かりません。しかも「生き物織」、考えたこともないのですがなぜか夢に出てきました。堤中納言物語の「虫愛ずる姫君」の影響でしょうか。

＜夢5＞「女性が誘拐されそうになっている」という情報をキャッチした我々刑事たちは、直ちに海辺の喫茶店に向かった。そして男女の仲に割って入り、無事に女性を保護した。女性が「お礼に種入れぬパンを作る」と言う。ところがその中に豚肉を入れようとしているので、私は出エジプト記のマナ的故事を引き合いに説明して辞めさせた。無事に肉なしのマナが出来上がり、ユダヤ人の刑事も「トブ・メオッド」(とてもおいしい)などと言って食べている。

＜解釈5＞学生時代にイスラエルからの留学生と友達で、彼から学んだことが今の人生に大きく役立っているので、印象に残ったのでしょう。

＜夢6＞工業地帯を歩いていると、ユダヤ民謡の合唱が聞こえてくる。場違いに思っ
てその工場を覗くと、「社長がこの歌を気に入って社歌にしている」と言う。するとその社長が「私が取得した特許だよ」と言って、ドンガラ物の写真を見せてくれた。どの部分が特許だろうなどと首をかしげていると、社員たちが「社長が帰ったからさあ宴会だ」などと机やいすの並び替えを始める。私は面識のない人との同席は気が重かったので帰ろうとするが、廊下が八つ橋になっている上に自分の靴が見つからずに帰れないで途方に暮れている。

＜解釈6＞この夢も推移がかなり出たとこ勝負で、場面がどんどん変わってしまう。個々の場面は思い当たりがありつながりもあるものの、なぜか頓珍漢ですね。

＜夢7＞後輩信者に「最近は伝道活動に励んでいますか」と聞かれたので、「こき使われるだけで何のご利益もないから辞めたほうが良いですよと人々に進めている」と正直に答えた。すると「ああ嘆かわしい時代だ、このテオフィロもどきのあなたのために祈ります」などと言って、呼び捨てにした上に勝手に私のために祈り始めた。私は馬鹿らしくなってトイレに行ったが、その後輩は気づかずにいつまでも祈っているようだ。

＜解釈7＞キリスト教徒って、聖書に則りつつ自我を出すずるい技に長けているのですよね。不潔。

＜夢8＞出張を命ぜられたために切符を買ってきたが、経理が「領収書の金額が標準値より1円多いので受け取れない」と言う。大騒ぎしてやっと解決し、社長以下数人

瞑想録(その13)

で新幹線に乗った。そうしたら社長がへべれけに酔って私に絡んでくる。仕方なく一本背負いしたら、社長は通路で寝てしまった。目的地に着くとまず温泉に入れてもらえたが、「竹刀で尻を打つ」特訓が待っていた。そのあとには競馬の馬の名前が入ったゼッケンをつけてランニングをさせられた。

<解釈8>この夢に類したばかばかしい空騒ぎと四角四面の嫌がらせは、会社で嫌というほど経験しました。

18、教育と自由

以前の「洗脳と教育」と題した記事で、①洗脳と教育は紙一重であること、それと②「自由・平等・博愛」の具体的意味付けは押し付けるべきでないこと、の2点を指摘した。本日はこの教育と自由について、もう少し瞑想を深める。

人は本能を持って生まれてくる。自己保存のためである。本来の生物的目標からいえば、究極なのは個体の保存でなくて種の保存であるべきなのだが、つまり種の保存のためにはある個体が犠牲になることもやむを得ないのが生物学的な本質であるべきだ。だがこういうマクロな性質は複雑すぎて本能にそぐわない為に、いわば次善の策としてミクロの個の保存が本能としてプログラムされているのだろう。

しかしながら生まれてすぐならともかく、人は成長するにつれて早晚集団生活に遭遇する運命にある。そしてその集団生活を円滑に進めるためには、人個々の自然な成長を待っていては間に合わずまた確実でもない。そこで教育が必要とされ、施される。例えば「並んで順番を待とう」とか「人を殴ってはいけない」とかだ。教育の少なくともその初期の目的は、円滑な社会生活の実現のためにある。そして教育内容の大部分は、素の本能に対する禁止事項である。

この意味において、教育は自由のはく奪であるといえなくもない。そしてこのはく奪が過ぎればあるいはずれれば、それは洗脳になる。逆に足りないと非常識とされて、場合によっては集団から仲間外れにされる。結局他人と仲間にいるということは第一義的には、素の自由の放棄である。

では何のために、自由を放棄してまで集団生活を送ろうとするのか。皮肉なことにそれは自由を享受するためである。幼稚な自由を放棄して高度な自由を勝ち取るためにある限り、その行為は洗脳でなくて教育である。ではなぜそれほどに自由が大切な、それは人の目的がすでに個体の安全のレベルから個々個人の喜びという高い段階

瞑想録(その13)

に昇華されており、その究極は選択と身柄の自由にあるからだ。妹からミルクを横取りする自由を放棄してピカソの絵を堪能する喜びを得るのである。

人類にとっての最大の目標はキリスト教に無関係の、非宗教的で普遍的な「自由・平等・博愛」である。ここで自分の自由と同等に他人の自由も考慮すると平等と博愛は自ずと導出されうることから、人を幸せにする最大の手段は「自由」の一言で言い表せる。ただここで総論としては反対のない自由が、解釈のしよによってまるで違ったものになることに留意したい。「不自由になる自由」も、奇妙に聞こえるかもしれないが存在するのだ。

そこで「本当の自由とは何か」という核心的な問題になる。本当の自由について過去の歴史を振り返ってみるとあるいは種々の宗教を観察してみると、自由と不自由の位置づけがその閉鎖社会全体を目的に天下りの的に決められてしまっていることが分かる。そしてそのために使われているのが、教育という名の洗脳である。つまり洗脳と不自由、教育と自由は実は抱き合わせなのだ。

人類社会の最高徳目である自由、これは一言では言えない。これを正しく保持する秘訣は「自由とは何であってどうやればより高い自由を得られるか」を各個人が日々、具体的な事例に当たるごとに考えることである。併せて自由とは「一度獲得しても気を緩めると再びなくなってしまう」ものであり、自由とは何かを考える、その方法を教授するのが最高のそして最善な教育である。

5年前の東北地震の時にもあったが最近の熊本地震についても、「熊本地方の人々の行いが悪かったので神仏の罰が下った」などと平気で言う「予言者」とこれに騙される信者が結構居る。人は確かに因果を知りたがるし「結果には必ず原因がある」というのは仏教の教えでもあるが、開祖のブッダでさえすべての結果についてその原因を言い当てていた訳ではない。このような不条理な合理化は死者を鞭打つものであって、断じて避けなければならない。気に入らない人を潰すには「あいつはキツネ付きだ」と言えば、いとも簡単にできてしまう。これほど邪悪な自由の略奪は考えられない。

つまり自由を正しく理解して守るには武士道等の主観だけでなく客観的な思考訓練も重要である。そしてその意味においては現在の理系教育を中心とする欧米式の合理的思考法も、具体的な個別内容は別として意義のある教育なのだ。行き過ぎてロボット化した科学者も多いものの、迷信を避けるためだけでも科学教育は必要だといえる。経済価値生産の実用的側面を無視しても、科学技術教育は合理的思考法として価値があると言える。

こうして情緒と合理性を正しく習得した人たちが常に自由の形を考え続けることによってのみ、人の幸せと喜びがある。この時点で初めて教育と自由は好回転をしているのだ。この時点に至って初めて、本能の自由を制限してでも得て価値がある、本当の自由と喜びがある。

最後にアドラーについて触れる。アドラーはフロイト、ユングと並んで「3大心理哲学者」と呼ばれ、特に最近彼の言葉の「自由とは嫌われる勇氣である」という言葉で注目されている。ここにも「自由」という言葉が出てくる。この言葉が注目されること自体が「日本がまだ古い義理人情の呪縛から抜け出せていない」ことを意味して、私は残念である。日本はまだ自由の後進国である。

だが私に言わせてもらえば、自由を獲得するためなら人に嫌われることなど痛くもかゆくもない。重要なのは人と切れるタイミングだ。これにも居合切りのような絶好のタイミングがあり、タイミングを外して切れようとしても努力のわりに切れないのだ。切るべきタイミングが見えたら迷わず切る、これが自由の確実な得方である。そのために我々は日々精進しているのではないのか。

19、作用と応答

以前に、現代の数学や物理学は線とか平面とか直方体といった有次元空間を暗黙の前提として初めてなり立つ、特殊な内向きの世界だと指摘した。数、四則演算、方程式、行列式、合同、相似、平行移動等、すべて然りである。全部内部で収まっていて、外に破って出ようという気迫は全くない。

先ず数が順番に規則正しくあるとその間の足し算がありうる。だがこれが当然にあるわけではない証拠に、足し算も1の位の足し算についての一通りの暗記が必要である。続いて足し算の元は貝並べであるが、貝を一直線に並べる代わりに縦横に並べるとこれは掛け算になる。この時点での掛け算はまだ、単に足し算に従属する便法に過ぎない。しかも人工的だ。その証拠に掛け算は、九九の丸暗記があって初めて作動する。三角関数も暗記できるほどなら掛け算に次ぐ基本演算になるのだが、もはや半端な角度のサインなど一々暗記できずに爆発している。

さて、今見たように初頭な算数では掛け算は足し算に従属する便法であった。足し算は物理学でも意味をなして、2つの力の合力は、「 $F=F_1+F_2$ 」と足し算である。ところが力には「 $F=Ma$ 」(力=質量×加速度)と言う有名な公式がある。力は質量にも加速度に

瞑想録(その13)

も比例するからこうなるのだが、この式において掛け算はもはや足し算の下請けではなくて、1つの独立した演算である。この発想を数学に戻すと例えば円の面積は「 $S = \pi r^2$ 」であるが、ここでも掛け算はもはや足し算の下請けではない。

こうして足し算と掛け算がいずれも独立という立場になると、多項式とか連立方程式等の足し算と掛け算の混ぜ合わせが堂々と意味を持ってくる。そしてその先に負数や虚数あるいは代数方程式の解の公式やその存在定理が意義を持ってきて、現代数理科学の基礎となっている。現代数理科学がこうも多産な重要な要因は、数の単純さと掛け算の独立である。

さてこれらの数理科学あるいは外界の科学一般の作用の根本は、以上つらつら記したことからも分かるように「点の思想」である。点→数字→足し算→掛け算→多項式→方程式と進化していくし、物理的な力も基本的に質点という点に掛かるものである。ところが我々の心の内側の世界を見てみよう。誰かがあなたを策略で陥れようとしているとする。あなたは何とも言えない気配でその策略の存在を感じる。

ここで、より少しの兆しでその存在に気付くほど頭脳明晰で身もより安全だ。そしてこの逆ほど鈍感でバカなのだ。そして現代科学はこの手の雰囲気や気配等を主観的として否定するために、科学技術者には鈍感で幼稚なとっちゃん坊やが増殖しているのだ。いずれにしてもこの気配と言うもの、この感じ方は今「何とも言えない」と表現したように、脳内の「ある一点で」ではなくて「グワンと黒雲のように」である。つまりアナログ的に感じるのだ。アナログ的な感じだからそのありようはおおよそ言葉にできないし、言葉に変換しているよりも素早く対抗策を思いついて打つべきなのだが、いずれにしてもそれは黒雲のような気配だ。

そしてその黒雲の形や強さで相手が自分をどう陥れようとしているか察知して、逃げるなり反撃するなりほぼとっさに手を打つ。この反撃の打ち方あるいは対応方法の思いつき方を内省してみると、これも脳内のある「点」を採用するというよりは敵の黒雲に対して自分の白雲の適切な分布を脳内に想定して、その白雲の通りに事を運ぶという手段をとる。このように脳内の心象とは典型的にアナログであり形状である。

ところが日々の何気ないやり取りを見てみよう。「今日は早く起きたね」「うん、目が覚めちゃってね」、この単純なやり取りですら人の脳が介しているから脳内作用のより簡単な例となる。そしてこのような誰でも経験するやり取りにおいて、「今日は早く起きたね」を受けた人はこの情報を文字通りに、つまり解釈せずに脳に収納するのではない。

瞑想録(その13)

そうではなくて、「ああ、そういうことを聞いているのね」と脳内の1点とまではいわなくても極めて局所的な範囲にまとめて位置付ける。しかも論理を挟まない瞬間芸だ。

問いかけがまとめたの位置づけだからこそ、その返事も脳内のどこか関連する局所領域に発生して、その領域の心象を言葉に変換して「目が覚めちゃってね」という返事になる。言葉はあくまでも領域の近似だから、その時のちょっとした気分で「ちょっと気があってね」になるかもしれない。こういうやり取りをほとんど無意識に繰り返すことにより、人間社会は出来上がっている。

さてここで素朴な疑問が生じるの。なぜ、先の陰謀の例では脳内心象は黒雲のように広域であり、他方で日々の単純なやり取りの時はその心象は脳の局所的な領域に過ぎないのだろうか。同じく心象と言いながら片や超アナログでありもう一方はほとんど点である。こうなってくると脳内の世界の心象についての一般側や演算や作用素や蓋然法則を導くというのは、対象の形が違いすぎて絶望的にすら見えてくる。

この辺について本日は問題提起のみで答えは今後のさらなる瞑想を要するが、まあ、現象の多様性に気付いただけでもいくばくかの進歩はあったのかと思っている。

20、面白さの変化(昭和と平成)

「面白い」、これはほぼ人のみに許された高度な精神状態であり心象である。この面白い内容と対象が、昭和時代の私と平成時代の娘で結構異なっているのだ。面白いは後天的な心象だから異なるのは当然であるが、異なる様子を実例で見てみる。

先日娘に、「昭和3大変な歌」がなぜ面白くてどうして流行ったのかを聞かれた。ここで3大変な歌とは、「おら東京さ行グダ」、「帰ってきたヨッパライ」、「老人と子供のポルカ」の3曲である(MSワードのエラーを避けるために一部改変)。いずれも私が今の娘より若かった頃の歌である。

ちなみに私は最近、阿久悠さんの書いた「私論・愛すべき名歌たち」という本を読んだ。時代的にはこれら「3大」と重なっているのだが、この本にはこの3曲のうち「帰ってきたヨッパライ」だけしか言及されていない。また昭和のパロディ歌にはまだほかにもあるのだが、平成生まれの娘とフォロワーさんたちにはこの3曲が特に気になるようだ。

まず「おら東京さ行グダ」、青森出身の吉幾三が東北弁丸出しで歌った歌である。「自分の村には電気もデスコも何もなくて詰まらない、だから東京へ行きたい」と歌った歌

瞑想録(その13)

だ。この歌の面白さは何と言ってもその自虐性にある。自分の村がくそ田舎で無い
ない尽くし、若いのにやってられないよという訳だ。当時の農村の若者の卑屈な根
性が丸出しで、ここの部分だけならあるいはバカにして笑いながらも同情の余地はあ
る。ところがこの歌の落ちが、「おら東京さ行ってベコ(牛)飼うダ」「おら銀座に山買う
ダ」である。東京の何かも実は全然分かっていない。救いようのないカッペの極みで、
失笑してしまう。

次に「帰ってきたヨッパライ」、関西の学生数人が卒業記念に冗談で内輪で作った「曲」
が大ヒットした。内容は「車の事故で天国に行った若者が、行ってみたら酒と女の子だ
らけでウハウハしていたら、神様に蹴りだされて生き返った」というもので、音の倍速
変換などを使って笑えるノリにしてある。この曲は、天国というまじめな宗教概念をか
らかったところに面白みがある。いわば近代版の浦島太郎だ。なろうんちくを言うと、
これは酒を除けばイスラムの天国そのものののだが。

最後に「老人と子供のポルカ」、これは当時のとぼけた名わき役の爺さんであった左
ト全(ひだりぼくぜん)がメインボーカルで幼女数人と合唱するもので、「やめてケー
レ・ゲバゲバ」と言うフレーズは特に受けた。当時老人がメインボーカルと言うのは前
例がなくて新鮮だった上に、ゲバ棒の学生運動をからかったその行き詰まりに対する
開放感覚で受けた。左ト全は今でいえば蛭子能収(えびすよしかず)さんのような人
のよさそうなとぼけたキャラで、それが「いじめるのは勘弁ね」という歌いは時代にマッ
チした。

まあこんな感じで娘に説明したのだが、その面白みがどれだけ伝わったのか正直言
ってわからない。ただSNSのツイッターやYouTube等のおかげで今の若い人は
私のころの数十倍の知識を持っていて、守備範囲が結構広いのには驚いた。

さて、ちょうど良いチャンスだったので、今度は私が今の流行について娘にインタビュ
ーしてみた。萌えとか初音ミク辺りならなんとなくわかるので、私が全く分からずに素
朴に尋ねたのは、①進化、②擬人化、の2つである。私には心情は理解できないが、
今のゲームやアニメはこの2つをキーワードに大いに盛り上がっていると言っても過
言ではない。

まず進化、これを爆発的にはやらせて定着させたのはポケモン(ポケットモンスター)
である。これが出たのは平成10年ころだ。私は第1世代の赤・緑・青バージョン、ポケ
モンにして100体くらいしか知らないが、進化はその時にすでにあった。ただおじさん

瞑想録(その13)

には「だから何」という程度だった。ところがそれ以後出てくるほとんどのゲーム、モンスターだろうがオレカだろうがいちいち進化がある。

娘に聞いてみると、単にポイントが上がるだけで進化があるのとなないのでは、ゲームの面白さが雲泥の差であるという。いわば質的な変化により、単にビジュアルに面白いのと達成感が全然違うという。そもそも人工的なキャラであるポケモンが実物のカエルやキツネよりもかわいいという発想も分からないのだが、それが進化して次第にとげとげしいキャラになっていく、これが無限の湧き出す泉であるらしい。ちなみに「退化」もあった方が面白いのではないかと聞いてみたが、相手にされなかった。

次に擬人化を定着させたのは、世界の国を人に例える「ヘタリア」である。それ以後に県民性、刀、戦艦、キノコ等々、およそ考えられるすべてのジャンルが擬人化されている。おかげで娘は私よりも、世界や日本の民族性や戦国武将やキノコについてはるかに詳しい。まあ手段はどうであれ勉強してくれるのはありがたいし、今更オジサン式の勉強法でもないので歓迎している。

この擬人化の面白さについて娘に聞いてみたところ、そう言った無機物を人やキャラにすることによって①生き生きとしてくるし、②自由度も増えていろいろ動かせるようになるし、③相互作用の種類も増えて存在や関係がはるかに高度になる。そしてそこにファンタジーの要素も加味できて、まさにアイデアの泉だと言う。私は実感こそわかないものの、まあそういうものかと思った。ちなみに「動物化」とか「物質化」はあり得ないのかと聞いてみたが、ジジイのたわごとと相手にされなかった。

究極の質問として、「進化と擬人化の次に来る、第3の流行りそうなキーワードは何か」と聞いてみた。インタビュアーとしては才気ある質問のつもりである。娘の答えは「そんなものが分かったらとつくに起業している」だった。皆さん実は試行錯誤の上に、今の2つが流行っているのだ。この試行錯誤だけは昭和も今も変わらないようだ。

そもそも私が阿久悠さんの本を読んだのは、歌謡曲と言う庶民芸術から時代を解き起こせないかという動機だった。結果からいうと阿久悠さんでさえ、個々の曲の前後は説明できても時代全部の流れにはとても及んでいない。娯楽から見分ける昭和と平成、これも分析は楽でないようだ。ただ数冊の本で指摘されたのだが、今ではエスキモーもアフリカ人も子供は狩りなどせずにもっぱらゲームだという。良くも悪くも時代は変わっていて、オヤジが娘にできる最大なことは、邪魔をしないことだと知った。

21、街角経済から見た安倍政権

先週末のG7イセシマサミットで安倍さんが世界の首脳を前に「今の世界経済はリーマンショック前に似ている」と言ったとかで、大きな問題になっています。アベノミクス不発の言い訳のお墨付きが欲しかったようですが、誰の賛同も得られませんでした。むしろ市場経済のマインドを意味なく冷やす、近所迷惑が実態のようでした。

そもそもリーマンショックもリーマンブラザーズは多分にきっかけであって、本当の内容は実体経済を過大評価した投資家たちの虚構が一気に崩壊したと言うことです。その意味ではむしろ世界恐慌に似ているのですが、今の世界経済に多少の「計画未達」はあるものの過剰投機のようなものは見当たりません。

安倍さんはどうも最近になって「今増税すれば国の税収はかえって減収する」と見極めたようです。そうなればアベノミクスの失敗は数字で一目瞭然になってしまうので、増税延期の言い訳が欲しかったようです。でも舛添さんほど見え透いた言い訳では、専門家はおろか一般庶民すら騙せません。

政局はもうポスト安倍に移っているでしょう。次の総裁選はおろか、安倍さんが今の任期をまっ通せるかだって分からなくなってきました。アベノミクス失敗の理由は色々あるでしょうが、ここはやはり経済が安倍さんにとっての最大課題ではなかったということでしょう。彼の最大課題はあくまでも憲法9条の改正で、アベノミクスはそのための景気づけでした。今となってはその9条改正すら遠のいてしまいましたが。

振り返ってみるにアベノミクスの3本の矢である財政、金融、民活の組み合わせ、これ自体はさほど悪くありませんでした。大前研一さんに言わせると「新鮮味が何もない」そうですが、政治も会社経営と同じで古かろうが詰まらなかろうが過大広告だろうが儲かりさえすればよいのです。

そして財政と金融についてはいろいろ手を打ちました。金融緩和とか法人減税とかマイナス金利とかです。これらの具体的施策については効果の疑わしいものもありますが、経済なんてそもそも公定歩合とカレンシーの総量くらいしかいじる自由度がなくて、しかもいずれの自由度も正負の両側面を持っていて「正と負のどちらが鼻の差で勝つか」の勝負ですから、かなりの際物で当然に当たり外れはあります。

アベノミクスに関して言えば要するにこれらの財政と金融の施策が民活に結びつかなかったと言うことでしょう。産業界の動きまでいじろうとするとこれは統制経済になってしまいます。ですからここは産業界に自主的に動いてもらうしかなくて、財政と金融の

瞑想録(その13)

施策はその環境作りでした。ところがふたを開けて見ると「笛吹けど踊らず」だったわけですね。

そもそも安倍さんの経済政策の大元の見方は「なっちゃった経済」でした。動脈硬化して老人化した日本の経済を立て直すには人件費から年金から福祉から資産から、金目のもの全てを一律2割減とかするしかない。実際シンガポールのリークワンユーのようにカリスマのある政治家なら、そうしたことでしょう。

そしてこう言う強引なことができない安倍さんが狙ったのは、経済循環の好転により賃金も物価もフローがすべて倍増すれば資産等のストックは相対的現実的に半分になって、結果として同じ効果になる。なっちゃったものは仕方がない、こう言う結果論的な切り下げでした。

ところが残念なことに民活が作動しませんでした。景気と言うものは気の字があるからわかるように気持ちや気分や雰囲気の問題です。国民全体に景気浮揚感が醸成されれば、国民から貯金をことさらに引きはがさなくても金離れが良くなる、そういうおめでたい好循環を期待していました。

なっちゃったついでに言えば、安倍さんは貧富の差も容認する予定でした。米国型の「富める1割が税金の半分を払う」形の方が総額としての税収は増えますし、有能な外人経営者や研究者も呼び込みやすいし、人々の競争意識も高まって経済が一層好循環するからです。その分治安も悪くなるでしょうが、その辺は適当に手当てすればよいことでしょう。

ところが世相は逆に暗いことばかりでした。シャープと三洋はほとんど倒産で外資に買われ人員整理、東芝は粉飾決算でやはり人員整理、保育所は足りなくて一揆状態、海外に進出して平和裏に搾取しようという思惑は新幹線も潜水艦もほかの国に持っていけませんでした。

正社員比率は間もなく半분을切り、他方で今の若者は70歳まで年金が出ない。50歳を過ぎたらほとんどの人が20年間もガードマンとかレジ打ちバイトで若者に使われる人生です。そのころは年金額も雀の涙でしょう。これで雰囲気が良くなるわけがありません。

実際に私が肌で感じている街角景気です。近所のスーパーが「5%オフデー」の日に限り、いつもはガラガラの駐車場が入れないほどになります。たったの5%オフ、1万

瞑想録(その13)

円買っても500円、ラーメン1杯にもならないのですよ。それでもこれだけ集客が違ってきます。しかもスーパー内では設置されたただの給茶機から自分の水筒にお茶を汲み入れる家族まで結構います。好景気感はありません。

ただアベノミクスがまるで失敗かと言えば、株価は一応上がりました。まあ少しは成功しているわけです。さて政局はすでにポスト安倍、次に誰が出てくるのか、石破茂さんか小池百合子さんか知りませんが、焦点はアベノミクスに代わるどんなミクスを提案するかです。アベノミクスは好回転しませんでした、そうかと言ってこれ以上のスキームをどうやったら思いつけるのか、およそ見当が付きません。少しは成功している後だから、余計に思いつきにくいのです。まあどんな政策にしても原資を明確にしてから表明してください。

これで米国がトランプ大統領になって本気で在日米軍を縮小したら、自国自衛は当然で大変結構なのですし核兵器も開発できそうですが、そのための原資と人員はどこからいつまでに持ってくるのでしょうか。結局は増税か福祉切り捨てとすることでしょうが、これを言える人が今の日本にいますでしょうか。老人日本に若返りの特効薬などありません。

22、自明と説明

私のライフワークは「素朴な疑問と意外な気付き」ですが、その重要な一分野である脳の構造の要諦は「人は点や論理でなく形やモチーフで事物を理解する」です。これについて「このアルゴリズムは科学というより芸術だよな」と思うようになってきたので、最近専らこっち系の本を読んでいます。

最近読んだ本をいくつか挙げると、美術では月刊美術手帖、音楽では阿久悠さんの「愛すべき名歌たち」、文学では明治以降の代表作を簡潔にまとめている個人サイト、そして最近コピー(宣伝文句)が気になって「日本のコピーベスト500」を読んでいます。展覧会にもずいぶん行きましたし、ユーチューブのお世話にもなりました。

これらの分野の直接の鑑賞対象はすべて形とかモチーフ、究極には非言語か仮に言語であっても非日常な使い方をしているものばかりです。若いころは数理科学や論理学のみで少なくとも理系の教科書以外ほとんど読んだことがなく、「証明できないものは価値がない」と思い込んでいたころに比べれば、自分なりに大きな世界観の拡大だと思っています。

こういった評論では非言語あるいは非日常か長大な言語作品について、何とか評論読者にも本来作品の価値観やモチーフを手短に共有してもらおうと努力しています。そもそもの原作が非論理であることもあって、多くの場合より論理的な解説をつけようとし、一般的に論理的であればあるほど解説者として優れているあるいは良くできた解説であると思われる。

ところが例えば原作が絵や音楽の場合、そのモチーフはあくまでも心象としての「あれ」であって、極言すれば「あれ」とか「脳内のあの位置」としか言いようがないものです。それを何とか言葉で伝えようとするものですから、どんなに良くできた評伝であっても所詮は近似に過ぎません。その対象を見た時の素直な感動に比べれば解説は自分を白けさせるだけに過ぎないという、解説とは因果な商売なのです。

でもそういう原理的ハンデも恐れずにあえて解説してくださった人々のおかげで今我々もほぼ共感できている、少なくともその気になっているわけですから、これは価値のあるありがたい作業でもあります。誤解を恐れずにあえて言えば解説は必要悪です。あるいは人間の生まれながらの業(ごう)だと言っても良いでしょう。

その解説にもいろいろな形があります。ストレートにどこが面白いかを説明しようとするもの、歴史や文化的背景を絡めながらその中に位置づけようとするもの、果てはその作品にまつわる個人的な体験をつづることによって解説に代えようとするものなのです。先にも断ったように解説の目的は読者がそれによってご本尊にどれだけ感情移入できるかにあります。

ですから実は、「論理的なほど良くて個人体験は劣る」などと簡単には割り切れません。むしろ個人的には作品の原動力を徒(いたずら)に3.11大地震やその他の大事件と結びつけようとする種類の解説の方が、論理的ではあるものの特定の視点を押し付けられているようで嫌いです。他方個人的感想の方はぴたっと嵌りやすいのですが、生きた時代が違くと基礎体験の欠如の故にどうしても入っていけないという欠点があります。

それにしても近似を超えて本物よりも本物らしい優れた解説も存在します。例えば八代亜紀の「舟歌」について、「阿久悠さんは日本特有の無や空の哲学をひねって『少しだけある』と言い換えた巧妙さ」と言う解説には感心しました。あるいは若冲を「元祖イラストレーター」と一言で言い切る解説も、本質を掴んでいて上手いと思いました。ドストエフスキーを「ロシア人の半分は精神異常かアル中だ」と、彼の長編を本文には出

瞑想録(その13)

てこない言葉で短くまとめる解説もなかなかの腕です。さらには「モーレツかビューティフルへ」と言うコピーに「昭和への挽歌」とまとめる一言評論も、感心するばかりです。

私がまだ中学生の頃に音楽の授業で、先生が「若い力」という曲を取り上げたことがありました。「若い力と感激に、燃えヨ若人胸を張れ、歓喜溢れるユニフォーム、肩に一片花の散る…」という歌で、今でも「青年運動会」とかでは使われているかもしれませんが。私はこの歌が「大人が作った子供向けの歌」、今でいえば「將軍さまを称える歌」みたいにわざとらしくて嫌いでした。そして音楽の先生のこの歌の解説は技能系の教師に良くありがちな、ほとんど単なる歌詞の読み上げでした。そして当時生意気だった私は「なんだ、単なる読み上げで何も説明していないじゃないか」と反論して、しばらく干されました。

しかし今になっても思うのですが、解説はあえて白けに甘んじても別の言葉で展開しないと解説したことにならないのです。「約束は約束だ」、こういう言い方を良くします。聖書でも神は自分を”I am that I am.”と自己紹介しています。こういう言い方は既に分かっている人にしか分からないという意味で、解説としては全くの0点です。「約束はこれを破ると以後信用してもらえない大切なことだよ」等に展開して、初めて解説です。

「約束は約束だ」こういう言い方を「自己引証」と言って、現代論理学では「論理でない」と除外することによって論理の完備性を保証しています。安直で姑息なすり抜け方です。テネシー・ワルツの歌詞の中には「テネシー・ワルツ」と言う言葉が入っていますが、これも一種の自己引証です。自明な人には自明ですが論理的に理解しようとする と無限ループに嵌って、勘所がなくて分からない人には永遠に理解できません。

ちなみにこの手の自己引証は、従来の点集合と完全論理に基づくときは除外するのに正当な理由がつけられます。 $C=\{A,B\}$ としたときは「元である A と B については理解ができている」と言う暗黙の前提があって集合 C を理解できるところ、ところが $A=\{A\}$ としたら、元の A は実は分かっていないことになって反則だからです。

しかし今私が瞑想している、無限連続こそが基本要素の「形とモチーフの視点」からすると先の集合は、「まず C があってこれを展開すると $A+B$ (相互作用あり) になる…」と疎から細に下っていく形になります。つまり先ず輪郭を見て次第に細部に下っていくという形になります。そしてこちら方が人の認識の仕方として自然なのですが、他方で自己引証を禁ずる理由は無くなります。現に自己引証は多分に禅問答と同じ構造で

あり、少なくとも形式上はいかなる解釈や展開も正解になり得て、正誤でなくて優劣を理屈でなく感情で判断することになります。

こういう視点に立つと、「絵や歌のタイトルが言葉であることもまだ芸術として未完成だ」という私の主張も賛同してもらえるでしょう。絵や歌のタイトルが再び絵やアイコンであるとかあるいはその絵自身のサムネイルだって、これは芸術である以上規制されずにあるべきことなのです。

こう見てきて、先の音楽の先生が「若い力」を読み上げでしか「解説」できなかった理由が分かってきました。この歌はきれいごとでこてこてに固めた不自然で人工的な歌なので、薄っぺらすぎて歴史も背景も思い入れも何もかもおよそ入れる余地がなかったのです。

23、内にこもる科学

世の中は数字や演算や論理が大手を振って歩いていて、これらを使わないと原始人か知恵遅れであるかの差別感がある。そしてこれら数値、演算、論理のみで構成されるのが科学である。科学はその経済効用や生活恩恵の大きさから現代では非常に重要とされて、特に戦後の義務教育は科学の客観教育一本やりである。

大学の役割も建前上は、これがなければ人でない科学技術の技能や思考様式を身に着ける場である。現実には一昔前のお茶やお花と同じで一般教養や嫁入り道具のような単なるステータスシンボルでしかない上に、お茶やお花にはまだあった人格の醸成や社会常識とは無関係の位置にある。

私は以前から指摘しているが、人の気づきやひらめきや認識は数字や演算や論理によるのではなくて、第一義的には形とモチーフである。そして形やモチーフの特徴は、①それがそもそも広大無辺(不定形)であるために有次元線形空間(縦、横、高さ、時間の箱)には収まらずに非次元空間が基本であることと、②他方で数字や四則演算や完全論理は有次元空間と言う特別な場合でしか成り立たない、という齟齬である。

つまり数字、演算、論理はその厳密さにおいては比類のないものの、形やモチーフと言った自由度が高く美しく広い世界から見ればきわめて特殊な世界の内側にこもっているのだ。あたかもタコが自分の足を食って生き延びるような、当たり前のことを証明して生き延びている、多分に不毛な世界であるのが実態だ。

瞑想録(その13)

実際に科学で証明できることあるいは科学に限らなくても証明の対象となる部分とは、きわめて基礎的なさ箱庭のような世界に限られている。現実社会の複雑性やアートの美しさには、その力はとても及ばない。つまり科学は自らを例外的に狭い世界に限定して自由を捨てる代償として、初めて厳密性を得ているのだ。

他方より広いアートの世界は、その美しさや楽しさや気づきの鋭さに大いに感動させられるが、残念なことにそこには厳密な意味での演算はない。仮にきわめて基礎的なアートである家紋や紋章や文字に限っても、「笠松紋と丸に橘紋を加算する」などと言うことは考えられない。市松模様や格子模様の整然さは幾何学の定理に通じるものがある。それでもなお、単純な市松模様から「子持ち市松」とか「市松に五三の霧」とかを発展させる発想の豊かさはもはや数字でも演算でも論理でもない。そしてここに強引に数字や演算や論理を入れようとしても、単に文様の多様さや美しさを不当に制限するだけである。

これを称して「アートは非科学的」だとか「暇人の無駄ことでたまたまの思い付き」と見る向きもある。確かにそういう種類の歯がゆさはあるのだが、アートの方を正(ポジ)あるいは本来と見る立場に視点を変換するならば、演算や論理で閉じちゃっていて答えは1つのみに自動的に決まってしまう、何の自由度も見えない科学の世界の方が非人間的に不自然に見えてくる。

ここまで不自由だともはや束縛された奴隷である。ここで気づいて欲しいのだが、世の中で証明可能なことつまり証明と言う特殊手続きに乗る事物は原理的に極めてわずかしかないということだ。しかも「証明の対象になり得る」と言うことは同時に、その回答は設定された質問と同じ地平に縛られていないといけないことを意味していて、あたかも頭が抑えられていて早晩窒息しそうに息苦しく感じる。無理やり棺桶に入れられたようで、手足さえ伸ばせないのだ。

ではその特殊な世界をいじるのに、なぜ優秀な人材や特殊な能力が必要なのか。広い非次元世界の手法をそのままに、単に対象を狭い有次元世界に限定すれば済むだけの話ではないのか。実はそういう面はある。科学技術における発見手順をつぶさに見てみよう。

新たな定理を発見するにも新しい実験施設を組み立てるにも、実はそこに働いている能力は四則演算のパソコンにもできるような誰でも「形通りにやれば一夜漬けでも100点」と言うような機械的能力ではなくて、むしろアートの創作に近いような、無から有を作るひらめきである。演算ばかり得意で「教科書的な知識のみ全部マスターしてい

るが何も発見できない科学者」は山ほど居るが、こういう石潰しの頭の根本構造は「科学はアートであってはいらない」というやはり内向きで意固地な信仰である。こういう種類の「研究者」を「テイストがない」と呼ぶ。

それでもなお、例えば天才画家が同時に微積分もすらすらできるかと言うと決してそうではない。そこには特殊な世界ゆえの特殊な能力、つまり四角四面に物を見る能力やすべてを理屈で完璧に見通さないと気が済まない能力が必要だ。そしてこういう特殊能力に長けた人が理系に進み、そういう能力がない人が文系に進む。どちらが幸せかは分からないが。

ところがなぜか、「演算や論理に長けている人は物分かりが早い」という一般的な傾向がある。どうして特殊な能力と総体としての頭の良さに連関があるのだろう。この主な理由は、特殊な世界の演算や論理操作の能力の主要な部分は分析能力にあり、世の中の仕事や決断全般で一番重要なのもこの分析能力であるという、このある意味での偶然の一致だ。

そしてこの偶然の一致により義務教育の大きな部分を科学教育にし、かつ大学入試も科学的能力で測定されることが肯定されている。ただし弊害として総合力や全体感の養成や人間力の涵養が軽んじられているために、有名大学を出た割には使えない人種が、一定割合で存在している。その反省か最近では義務教育でも行きすである程に部活が重視され、大学生でも特に会社就活では「どれだけ遊んだか」が重視される。

これを称して「ホワイ・ジャパニーズ・ピーポー」の厚切りジェイソンが「日本の就活面接は変だ、誰も会社でクラブはやらないでしょう、それより具体的な企画を聞いてよ」と言うの。だが残念ながらこれは少なくとも今のところは、日本の勝ちだ。日本の学生は全体感や総合力や交友関係や社会常識を、授業ではなくクラブ活動や遊びで習得しているのである。これは即ち「今の日本の大学教育がカタワだ」と認めていることになるのだが、現に教官たちが「大学は学問の場であってそれ以外については知るところではない」などと平気で威張ってさぼっているうちは、実際にカタワなのである。

24、自由を求め無駄を嫌う

今までの記事も自分の振り返りによる自己改善を目指したものでしたが、本日の記事は特に自分自身の振り返りの総まとめなので余計に個人的性格が強いです。まあ中には、「自分も同じだ」と賛同してくださる人も居るかもしれませんが。

瞑想録(その13)

自分自身を振り返ってみるに私の人生は、①「自由を強く希求する」、②「無駄をしたくない」の2点に集約できる。まあ誰でも多かれ少なかれそうではあろうが、私の場合そういう普通の人たちの100倍もこれらの項目の希求が強いのだ。

大学のカリキュラムも発想の自由を縛りカビの生えた「学問基礎」を一方向的に注入するだけの存在で反吐が出た。長い会社生活もやはり自由を奪いかつやる前から無駄だと分かっていることばかりで、すべて苦痛で私は常に怒っていた。ではその間私は怒っていただけで何もしなかったのかと言うと、気に入って自ら選んだ事項についてはそれこそ寝る間も惜しんでやった。それが自由の謳歌だったからだ。

大学ではサークル活動(民族音楽舞踏)やそれをきっかけとした世界の文化や言語や歴史の研究に熱中して本を出すほどだった。会社人生の間は今こそやっとなライフワークであると感じてきた「素朴な疑問と意外な気づき」の瞑想をそれこそ死に物狂いで真剣そのものに無駄なくやってきて現在に至っている。いずれも自ら好んで選んだ事項だからだ。

他方で自由を奪うもの全てには常に心底から怒りがこみあげていた。指導教官、上司、親戚等あたりかまわずすべてだ。そして自分のやりがいのために世間体無関係で、日々1秒でも早く帰宅しようと努めた。なおここで自由を「自由・平等・博愛」と展開しても良いのだが、平等や博愛を口実に人に無理を要求するとか自由を奪と言う経験が余りにも多かったので、掛かる火の粉を振り払うためにも今は単に自由とだけ言っている。

私は学生時代、数理科学が得意で好きだった。だから大学では理学部を選んだのだが、これが大学の授業になると実は息苦しいことが判った。その理由は今ならばわかるが、証明可能と言うことは結論に関して閉鎖した内向きの社会である、つまりその証明論理の平面内から脱出できず創意工夫の余地もなく息苦しくて自由のないものなのだ。一言で言って手続きとして無味乾燥だ。加えて何気に、大嫌いなキリスト教の影響を受けている。

理学部にはお絵かきや簡単な文様創作にすら見える創造性、この良き物の入る前向きの余地が全くないのだ。かといって工学は単に雑学の塊で、結局大学に光明はなかった。絵画やデザイン等のクリエイティブ系にもっと才能があれば進路変更もできたのだが、残念なことに私はあまりにも才能がなかった。加えて、「しつこく公募展に応募して審査員の爺さんたちにやっとな理解されたほんの一握りのクリエイター以外は全員下請け仕事」と言うこの業界の保守性や人種差別の厳しさも、二の足を踏ませた。

ではサークルを通じて好きになった世界の文化史関係を深める、例えば国際交流学科に転科するとかをなぜしなかったのか。その答えはやはり「自由」だ。自分の好きなやり方で自由に勉強しているうちは楽しいが、どんな学部であれ所属するとまずその分野の死んだつまらない基礎概念の詰込みやお行儀などを仕込まれて、結局嫌になると分かっていたからだ。

私は自分のファンタジーを、爺さんたちの古めかしい常識に胡麻をすることで殺したくなかったのだ。そういう訳で、今に至るまでアマチュアリズムを通して。そして現在ライフワークとして探している事とは私のような異端児に居場所があるように、適度の実用性と適度の論理性を兼ね備えた新分野の創設だ。理論的過ぎても息苦しいし雑学の塊ならバカでもできる。そして現状はその中間分野がない。

その新規分野は先ず科学技術ではない。科学技術の内にこもる証明手順とは背反だからだ。かといってアートも、クリエイティブではあるもののどのアートでもやはり基礎練習、つまらないけど効率的なバイエルをやるみたいなお行儀があるので、ここもまた違う。だから私の分野とは結局これらの間のまだ見つかっていない所にある、直感がそう教えているのだ。強いて言えばSFに一番近い分野か。

ところで大学時代のサークル活動、これだって「まず基礎から」なのになぜ面白かったのだろうか。遊びだからだろうか、端的に言えば先ず「バイエルの時点で既に面白かった」、そういう分野でそういう構成になっていたことだ。この辺は文部科学省でなく経済産業省の管轄であるカルチャースクールの方が進んでいる。

第二に、先輩方から建前でなく本当の世の中のありようや、科学や授業にはない全体観的な視点を教えられて、それらが有益かつ極めて新鮮だったからだ。実際私は授業から得た良いものは何もなく、人生観はすべてサークルと言う遊びから得ている。

この①有益で②新鮮で③初めから面白い、私が今探している分野もまさにこれで、その意味ではサークル活動は今でも私の人生を開いてくれた、きわめて貴重な体験だったのだ。もちろん人間関係もある以上は、すべてが楽しいことだけであったわけではないが、それすら勉強になった。

もう一つサークル活動が面白かったのは、それがアナログだったからだろう。形やモチーフがあり空理屈は介在しない、頭も体も同時に使う分野できわめて人に自然だっ

瞑想録(その13)

たのだ。加えてそれはどちらかと言うとアートだったので発展に次ぐ発展で、論理演算(群)で強引に元の小さい閉じた世界に引き戻されるということがなかった。

最後に断っておくと、私は「自由を求めて無駄を嫌う」と言ったが、自由とはそもそも一定の無駄を許容するものであるから、これは矛盾ではないかと言う反論もありそうに見える。だがここで私のいう無駄とは世間一般の功利主義者が決めつける無駄ではなくて私の主観から見た無駄、具体的には私のライフワークにおよそ寄与しないつまらないしきたりや常識等だ。典型的には会社の仕事で、外から持ち上がる諸トラブルを順次ごまかしていただけだからそこにはモチーフもなければ得るものもない。会社は単なる単に時間賃金変換機でありかつ必要悪である。

2016. 06. 09